

# 多摩留学生教育研究論集

The Tama Bulletin of International Student Education

第 11 号

Volume 11

東京農工大学国際センター

Tokyo University of Agriculture and Technology  
International Center

電気通信大学国際教育センター

The University of Electro-Communications  
Center for International Programs and Exchange

2018年3月

March 2018

## 目 次

### 報 告

日本語読解作文授業における ICT 活用	岩崎 浩与司	1
UEC 漢字ロードマップの開発 — 語彙先習の観点からの検証 —	笠原 (竹田) ゆう子・中嶋めぐみ・三好理英子・濱野哲子	8
電気通信大学における国際科目 — UEC Academic Skills I (Computer Literacy) —	CHOO Cheow Keong	16
外国人留学生の学生生活保険の加入と利用 — 電気通信大学の正規留学生について —	濱野 哲子	24
「マルチモダリティ」という視点から考える日本語授業 — 理系大学院生を対象としたプレゼンテーション活動を事例に —	本郷 智子	31
英文要旨		37

# 日本語読解作文授業における ICT 活用

岩崎浩与司\*

本稿では、筆者が東京農工大学で行った日本語読解作文授業における ICT 活用について報告する。農工大の留学生は、初級以降の段階で読み書きに苦手意識を覚えている者がいるなど、同じ中級という括りでも技能別能力に差がある。そのような状況の中で、筆者は履修者全員にとって意味のある読解作文コースをつくるために、教育用 SNS の Edmodo を使った作文活動と、オンラインクイズによる読解の予習活動を行った。作文活動では、学習者が多様なリソースを活用して自律的に学習する環境をデザインした。オンラインクイズでは、語彙と漢字の予習を授業外の自習とすることで、授業時間を読解のスキルアップに使えるようにデザインした。これらの活動がコースの課題に対してどのような効果を与えたのかについて考察を行った。

キーワード：ICT Edmodo 読解作文 オンラインクイズ 個人化

## 1. はじめに

近年、政府の情報化戦略によって教育への ICT (Information and Communication Technology) 活用が広く行われるようになっており、日本語教育においても ICT ツールの活用が盛んになってきた。例えば、90 年代から数年に一度行われている CASTEL/J (日本語教育支援システム研究会) [1] などの研究会によって、日本語教育で使用可能な ICT ツールについての最新情報を入手することも比較的容易になってきた。また、インターネットで自由にアクセスすることができる e ラーニング教材も多数開発されてきた。このような状況の中で、日本語学習者にとっての学習方法の選択肢は広がりつつあると言える。

しかし、学習者がアクセス可能な教材が増える一方で、それらを教師が具体的な日本語の授業でどう活かすのかという情報に触れる機会は充実しているとは言い難い。e ラーニング教材開発者は、教材そのものの使い方についてはわかりやすく説明するように努めるものの、具体的なコースや 1 回の授業の中で教師がそれらをどう使用するのかということに関してまでは十分に情報提供できていないことが多い。日本語教育において授業改善を目的とした ICT 活用を促すためには、単にツール自体の紹介にとどまるのではなく、コ

ースや授業の具体的な文脈の中でのツールの活用方法についての知見を公開、蓄積していくことが望ましいと考える。

筆者はこれまで東京農工大学 (以下、「農工大」) において約 3 年間、初中級レベルの読解コースを担当してきた。このコースの中で、いくつかの ICT ツールを試行錯誤しながら使用してきた。本稿では、このコースが抱えていた課題とそれらを解決するために使用した ICT ツールについて紹介する。

## 2. 農工大の中級読解作文コースが抱える課題

筆者は 2014 年度秋学期 [2] から 2017 年の現在まで、週に 1 コマ、日本語読解作文にかかわるコースを担当している。この授業の履修者は農工大か自国で初級日本語コースを一通り終えた程度の日本語学習者がほとんどである。履修者の中には、短期プログラムの学生と、学部・大学院の補講として日本語科目を履修している学生がいる。初級を終えた農工大の留学生の日本語能力の問題として、初級段階で口頭表現を中心に学習してきたため、ほとんどの学習者が読み書きに慣れていないという状況がある。理系のゼミに参加したり、研究者を目指したりする彼らの当面の日本語ニーズは、周りの日本人教員や同僚と、日本語による日常コミュニケーションで良好な関係を築

くことにある[3]。そのため、農工大では初級段階で口頭での日常コミュニケーションを中心にした学習、練習が中心に行われているが、初級が一通り終わり、さらに日本語を学ぼうとする学習者は、読み書きの壁にぶつかる。特に後に日本語能力試験の受験を希望する学習者には、読む能力は必須になる。

筆者が担当するコースの学習者には、口頭能力が高いものの読み書きに慣れていない学習者が少なからずいた。また、そのような学習者がいる一方で、読み書き能力が口頭能力よりも高い漢字圏出身学習者がコースを履修することもあった。このようなコースにおいて、筆者は履修者全員にとって意味のある学びを生み出すために、読み書き能力を伸ばすためのいくつかの活動を試行してきた。そうした活動の一環として、以下、3章では ICT ツールの Edmodo を使用した作文活動、4章では読解の予習のためのオンラインクイズ活動について紹介する。

### 3. Edmodo での作文活動

上記の認識から、筆者は読解作文コースにおいて学習者を日本語による読み書きに慣れ親しませるための活動が必要であると考えた。そこで実施したのが SNS (Social Networking Service) を活用した作文タスクである。この活動は、毎週身近なテーマについて写真と短い文を投稿し、クラスでシェアするというものである。

活動を始めた 2014 年度秋学期に筆者が使用したのは Facebook[4] のグループ機能であった。Facebook は学習者が日常的に使うツールであり全員が操作に慣れているというメリットがあった。しかし、逆に言うと教師や学習者がクラスでシェアしたくない個人的な情報に触れる機会もできてしまう危険があった。そのため、Facebook の使用は 1 期間で終了し、教育により特化した機能を持つ SNS を使用することにした。そこで 2015 年度以降に筆者が選択したツールが Edmodo (エドモド) [5] である。

Edmodo は Facebook に似たインターフェイスを持っていて、クラスごとにグループを作成できる。基本的な機能としては、①文章や写真の投稿、②投稿への返信、③投稿への評価機能(「いいね」などをクリックできる)がほぼ Facebook と同じよ

うな操作でできる。そのほかにも、オンラインクイズを作成する機能(4章で詳述)や、クラスアンケートを取る機能、クイズなどの成績を管理する機能、クイズや教材を保存したりシェアしたりする機能がある。登録は教師、学生、保護者の ID に分かれていて、保護者が授業の内容を Edmodo 上で見ることも可能である。そして、全ての基本的な機能が無料で使用できる。

本章では、Edmodo を使用して具体的にどのような活動を行い、どのような成果があったのか、学生からデータ使用許可を得られた 2016 年度春学期の活動と調査を基に紹介し、2016 年度春学期以降の活動の改善点についても述べる。



図 1 Edmodo のホーム画面

#### 3.1. 2016 年度春学期の作文活動概要

2016 年度春学期の受講者は 4 名(母語別: ベトナム 2 名、中国 1 名、カンボジア 1 名)であった。作文活動では、毎週 1 つのテーマについてそれぞれが Edmodo で作文を投稿する課題を出した。テーマは基本的に教師が設定したが、学習者に意見を聞いて取り入れることもあった。表 1 は 2016 年度春学期の作文のテーマの一覧である。「7. 私の高校」は学習者からの発案で出されたテーマである。

表 1 2016 年度春学期作文テーマ

1. 自己紹介	6. 私の専門
2. ゴールデンウィーク	7. 私の高校
3. 私の大切なもの	8. 私の近くの日本
4. 私の晩ごはん	9. 私の夏休み
5. 気になる日本語	10. 私の大切な人

活動のデザインに際して、いくつか工夫をした。まず、テーマは、お互いのことを知り合えるような具体的で身近なものを選択した。作文のハード

ルを下げるために、写真を必ず添付し、文章は長くしすぎないように促した。互いの投稿への理解を深めるために、Edmodo 上での相互コメントを推奨するとともに、授業で Edmodo をディスプレイに映し、互いの投稿について紹介、質問する時間をとった。投稿内容に関連して、教師、学習者ともに未知の物（例えば国の食べ物など）や、未知の場所などの情報があった場合は、画像や地図の検索をその場でして、知識を共有した。また、教師もクラスコミュニティの一員として、積極的にテーマについての投稿やコメントを行った。学習者の希望もあり、それぞれの作文に対して教師が添削を行って個別に返却した。

### 3.2. 活動の成果

2016 年度春学期は学期末に学習者に対して活動についてのインタビューを行った。インタビューと作文、授業記録をもとに、この活動の成果を3点にまとめた。

#### ①文章、語彙、漢字の自律的学習

学習者は作文を書くにあたり、文章や語彙、漢字を自律的に調べたり考えたりして書いていた。インタビュー（以下、「INT」と表記）では次のような発言があった。

- ・「なんか、文を使うこととか、意見を説明するとか、全部自分で作ります。とてもいい。」(学生 INT)
- ・「文章の書き方とか、漢字勉強するとか、みんなのストーリーを読む、面白いです。」(学生 INT)
- ・「書き方は、いつも、どうやって書こうは、いつも自分で考えて、それでは、とてもいいと思います。」(学生 INT)

#### ②多様なリソースの活用経験

①にも関連するが、学習者は作文を書くために辞書、オンラインツール、日本人の友達など様々なツールやリソースを活用して、自分に必要な語彙や表現を獲得していた。

- ・「もしむずかしいの説明ときは、自分で辞書が調べて、それで、書きます。簡単なのは、辞書が調べない。」(学生 INT)
- ・「ときどき友だち。難しいの文を作るとき、(研究室の)友だちに聞きます。」(学生 INT)
- ・「(ほかの人の作文が)読めないとき、コピーをして、Google translate に paste をします。そして、読み方が分かります。意味も。」(学生 INT)

このように学習リソースやツールの使い方に

慣れておくことは、このコースに限らず、継続的な日本語学習にとって役立つ経験となりうる。

#### ③自然でリアルな会話の発生

川口 (2016) は、外国語の学習において学習者が経験、感情、思想について何らかの表現が少しずつできるようになることを、教授・支援する人が保証する必要があると述べ、そうした指導理念を「個人化」と呼んでいる。この個人化の考え方をもとに、活動ではできるだけ個人の生活や思想が表れるようなテーマを設定した。たとえば、「私の近くの日本」というテーマでは、身近にあって日本を感じられるものを紹介してもらった。教師と学習者から出た作文内容は、「野菜の直売所」

(岩崎)、「100円ショップ」(学生1)、「子どものときに読んだドラえもんマンガ」(学生2)、「ホストファミリーにもらったダルマ」(学生3)、「バスケットができる学習センター」(学生4)であった。このように同じテーマでありながら、それぞれが違うものを自分の考えや経験とともに紹介する機会が生まれた。そして、授業時間での作文紹介では、互いが書いたものに対して自然に興味をわき、会話コミュニケーションが発生した。

・「(授業中の会話は) いいです。みんなでコミュニケーションや、質問、答えとか。テーマがあるので、やさしい、話せます。」(学生 INT)

また、授業で作文を紹介する効果として、授業での紹介があつて作文の内容がよく理解できたという発言もあった。

・「読むときは、ちょっと分からないですけど、授業でちょっと紹介します。そしたら、よくわかりました。」(学生 INT)

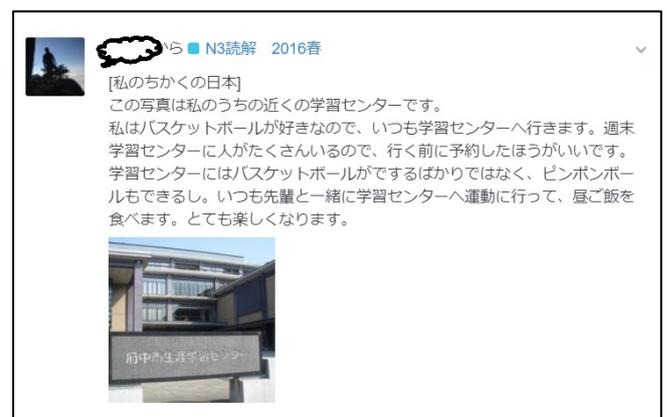


図2 学習者の作文 (私の近くの日本)

この活動によって、学習者のみならず教師も共

に個人化され、クラスで話したい、表現したいという内発的動機（デシ、フラスト1999）がわいてきたことは、一つの成果といえるだろう。

以上の3つの成果や教育効果自体は、類似の目的を持つコースでは一般的に目指されるものであり、ICTを活用したクラスに特化したものではないとも言える。しかし、週1回という限られた授業時間のコースでこのような学習効果を生み出すシステムを構築するために、ICT (Edmodo) の授業時間内外での活用が、履修者の学習の促進や動機付けに一定の役割を果たしたと考えることは可能であろう。

### 3.3. 2016年度秋学期以降のデザインの改善

本稿の執筆時点で、前節で紹介した2016年度春学期の後、2016年度秋学期と2017年度春学期の活動を終えた。ここでは2016年度春学期と比べて活動デザインにおいて改善した点を述べる。

#### ①オンラインツールの紹介

2016年度春学期の調査からは、学習者が様々なツールを活用して自分に必要な語彙や表現を獲得していることがわかった。そうした自律学習をさらに促すため、学期中に随時日本語学習に役立つオンラインツールを紹介した。紹介方法は、Edmodoでまずツールのリンクを貼って紹介したほか、授業時間中にもそのサイトをディスプレイに映して使い方を確認するようにした。

自分から ■ レベル4 2017春

みなさんLang8というウェブサイトを知っていますか？

<http://lang-8.com/>

作文を無料でNativeがチェックしてくれます。  
みなさんも書いた作文をpostしてみてください。勉強になりますよ。



Multi-lingual language learning and language exchange Lang-8

[lang-8.com](http://lang-8.com)

図3 オンライン日本語学習ツールの紹介

②文法解説サイトを利用したよくある間違いへの対応

学習者が書く作文の中には、文法的に不自然であったり、他の表現を使ったほうが良いと思われる文がよくある。筆者は、学習者の作文に対しては個別に添削をして返却をしていたが、何人かの学習者に同じような問題がある場合は、当該項目についての解説があるサイトのリンクを貼って、文法や表現を紹介した。このような対応をすることで、個別添削ではなかなか修正されなかった文法的な間違いがより強く意識化され、正しい用法が定着することがあった。文法解説サイトの中でも、東京外国語大学が作成したJPLANG[6]は、英語による文法の簡単な解説と例文紹介があるため、学習者に気軽に紹介することができた。サイトはEdmodoでリンクを共有しつつ、授業時間でもさらに確認した。

自分から ■ レベル4 2017春

「～が、～。」

「でも」や「しかし」と似ている表現で、「～が、～」があります。  
「でも」や「しかし」は文のはじめに使用しますが、「～が、」は文の途中で使います。  
ぜひ使ってみてください。

「～が、～。」  
<https://jplang.tufs.ac.jp/en/bu/9/9-4.html>

小さい間違いをしました、でも先生は親切でした。  
→小さい間違いをしました、先生は親切でした。  
(〇〇さんの作文から)



Jplang  
[jplang.tufs.ac.jp](http://jplang.tufs.ac.jp)

図4 JPLANGの紹介

#### ③テーマの改善と読解・要約活動

作文テーマは、学習者にとって身近な生活の作文を基本としていたが、少しずつ難易度の高い課題を出すことも考え、2017年度春学期には「気になるニュース」というテーマを出した。このテーマでは、作文を書くにあたって次の手順を取った。

- 1) やさしい日本語で書かれたニュースサイト (NHK News Web Easy[7]) から記事の一つを選ぶ。
- 2) 作文で簡単に内容を紹介する。
- 3) どうしてそれ

が気になるのかを書く。4) そのニュースに対する自分の意見を書く。

この活動では、それぞれが自分の興味に沿った記事を選ぶことで個人を表現できる一方で、記事を読むことで読解活動になり、その記事を紹介することで要約の活動にもなった。実際には学習者は記事の文から重要な文をいくつか選んで要約文を作り、それに対する自分の経験や意見を書いていた。この活動は、自分の興味関心と意見の紹介を目標とすることから、意味のある読解活動、要約活動にもつながり、多角的な言語技能の上達に寄与できるものであると考える。このテーマについて、学習者から研究調査の許可をもらっていなかったため、学習者がどのような作文を書いたのか具体的に紹介することはできないが、こうした活動の成果については稿を改めて考察していきたい。

#### 4. 読解活動の予習とオンラインクイズ

このコースでは、作文活動のほかに、テキストを用いた読解活動を行った。使用したテキストは学期によって異なるが、コースのレベルやニーズに合わせて、日本語能力試験対策問題や、日本の生活に関する文章を扱った。2016 年度秋学期と 2017 年度春学期には、授業で読解を行う前にテキストに出る語彙を自宅で予習するようにした。語彙の予習は、予習シートを前の週に紙媒体で学習者に配布した。学習者が各自予習シートで自習した後で、授業前までにオンラインクイズを受けるようにした。オンラインクイズは Edmodo のフォームで作成した。

##### 4.1. オンラインクイズの作成と成績管理

オンラインクイズでは、語彙と漢字の問題を出題した。クイズは予習を動機づけるための形成的評価が目的であったため、予習シートの内容を自習しておけばほとんど正解できるような難易度に設定した。問題形式は、選択肢の中から正しい語彙や漢字の読みを選択する選択問題、漢字の読みを書く短回答の問題を使った。Edmodo では、この他にも問題文の正誤を問う正誤問題、空欄を埋めて空欄問題、選択肢同士を一致させる一致問題などが作成できる。



図 5 Edmodo のオンラインクイズ画面

Edmodo のクイズの採点は、選択問題に関しては自動採点なので、選択問題の正誤は学習者がクイズを提出してすぐに結果が出る。記述式の短回答は、教師が正解か不正解かを確認して入力する必要がある。記述式の回答を含んだクイズの場合、教師の採点入力が終わってから全体の成績が出ることになる。なお、学習者の回答画面に教師が個別のコメントを残すこともできるため、不正解だった問題についてはオンライン上でフィードバックすることもできる。

テストの点数は、クラスごとの成績一覧に蓄積され、CSV 形式で教師がダウンロードできるので、成績管理が容易に行える。また、学期途中でも各学習者のそれまでの成績がパーセント表示されるので、クイズがうまくできていない学習者を教師が把握してケアすることにも役立つ。

Students	まるごと 初級 ...	まるごと 初級 ...	予習クイズ まるごと...
学生 1	94% 9 / 10	10 / 10	9 / 10
学生 2	96%	10 / 10	9 / 10
学生 3	94% 9 / 10	9 / 10	10 / 10
学生 4	89% 9 / 10	9 / 10	9 / 10

図 6 Edmodo の成績管理画面

##### 4.2. Edmodo でクイズを作ることのメリットと効果

読解クラスでは、語彙や漢字がわからないために、テキストがスムーズに読めなかったり、理解が深まらなかったりすることが多い。授業時間で

のテキスト読解中に語彙や漢字がわからないと、語彙や漢字の質問や学習者が調べる時間に多くを費やされてしまう。語彙や漢字を予習することで、そのような問題はなくなり、速読などの読解のストラテジーを身に付けることに授業時間を使えるようになった。この方式を取ったからといって、授業では学習者が語彙や漢字を完璧に覚えているわけではなかったが、少なくとも学習者は予習シートを見ながら読解に取り組むことで、読む行為に集中できた。読み書きに慣れていない理系の学習者にとって、こうした授業デザインは有効であったと考えられる。オンラインクイズの点数は成績に入れるようにしたが、日本語科目の成績が評価される短期留学生も、成績評価がつかない補講生も、どちらも予習を怠ることはなかった。オンラインクイズは、実施時間を10分(1問1分)に設定した。このように時間を区切っておけば、クイズの問題を見てから個別に辞書を引くことなどが難しくなるため、学習者が予習を終えてからクイズを受けることにつながったと考えられる。

昨今は、Edmodo 以外の無料アプリでもオンラインクイズを作成、実施することは可能である。その中で Edmodo を選ぶメリットとして、Edmodo が LMS (Learning Management System) のように授業に関する様々な情報のやり取りが可能なツールだということが言える。授業に関する情報をすべて Edmodo に集約すれば、学習者は Edmodo さえ開けばクラスで行われる課題などをすべて把握できる。また、教師にとっても様々な課題や成績を一元的に管理できる。

## 5. 考察

ここまで、読解作文コースにおける ICT 活用を紹介したが、本章ではこれらが2章で提示した課題をどのように解決できたのか、またできなかったのかについて考察する。

筆者が担当したコースは、読み書きに慣れていない学習者が多くいる一方で、読み書き能力が口頭能力よりも高い漢字圏出身学習者がコースを履修することもあり、履修者の得意とする言語技能にバラツキがあった。そのような中で、履修者全員にとって意味のある学びを生み出すことが課題であった。

この課題への対応について、まず作文活動でのアプローチについて考察する。学生インタビューでは、普段日本語で書く機会が少ない学習者から「コミュニケーションのために書くことがいいことだった」という内容の発言があった。このように、作文活動では学習者が毎週の作文によって日本語で書くことに「慣れる」経験をつくることができた。また、ICT を活用することで、文字によるコミュニケーションをはじめ、写真、口頭での発表・質疑、ウェブ検索や画像検索による情報共有など、多様なコミュニケーションチャンネルの使用を実現させることができた。このような学習環境のデザインにより、日本語の文字だけでコミュニケーションをすることに慣れていない学習者も、無理なく自己表現・他者理解が行うことができた。また、教室での発表を取り入れたため、読み書き能力の高い漢字圏出身学習者も、自身が書いた作文の内容と口頭表現の内容を一致させて説明する必要性が生まれ、単に書くだけではない統合的な学習活動につながった。漢字圏の学習者からは、授業での作文の説明が他の人に比べてよくできなかつたら「次はがんばろうと思った」というコメントがあった。

次に、オンラインクイズによるアプローチを考察する。前述した通り、このクイズは語彙の予習を促すための動機付けとしての役割を担っていた。このクイズがきっかけとなり、学習者は授業で扱う語彙を一通り学習してからクラスに来るという前提ができた。そして、語彙力が低い学習者がクラスにいても、授業中に語彙を調べる時間を取ったり教師が語彙を丁寧に解説したりする必要がなくなり、クラス全体で同じ読解問題に取り組むことができた。そのため、教師は履修者全員にとって有用な読解ストラテジーの解説などに比較的多くの時間をかけることができた。ここでの ICT (Edmodo) の活用の教育的効果は、授業外の学習の促進にあると言える。

一方、解決できなかった課題としては、語彙力、読解力がもともと高い履修者にとってのオンラインクイズの意義があげられる。クイズは、簡単な語彙の確認にとどめているため、こうした学習者にとっては、オンラインクイズとそれに伴う語彙の予習が効果的な学習につながったとは言い難い。こうした面では、履修者全員にとって意味のある学習活動をさらに考えていく必要がある

だろう。

また、作文活動については、これまで10名以下の比較的少人数のクラスで行ってきたが、クラスの人数が増えたときにどう対応するのかということを検討する必要がある。少人数の場合は毎回一人ひとり発表・質疑をする時間が取れていたが、クラス人数が増えたときには、口頭での質疑をやめて Edmodo のコメント機能を活用するなど、インターアクションの方法にも工夫が必要になるだろう。

## 6. おわりに

本稿では、筆者が農工大で行った作文活動とオンラインクイズの活動について紹介した。この報告が、履修者の日本語技能の差などで同様の課題を抱える教師の参考になることを期待している。「はじめに」でも述べたように、日本語教育の現場で教師が ICT ツールの意味のある活用ができるようになるためには、単にツールを開発して紹介するだけではなく、授業での創造的な ICT ツールの使用方法を考え、知見を共有していくことが重要であると考えられる。本稿の報告もその一助となれば幸いである。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、実践と研究を許可してくださり、ご協力くださった東京農工大学の先生方と学習者の皆様に感謝いたします。

## 注

- [1] <http://castel-j.org/>  
(2018年2月16日閲覧)
- [2] 東京農工大学の通常の日本語コースは、4月から7月末ごろ、10月から翌年1月末ごろまでの2期である。本稿では4～7月期を春学期、10～1月期を秋学期と呼ぶことにする。
- [3] 理系留学生にとっての日常コミュニケーションの重要性については、ソーヤー (2006)、重田・三浦 (2011) などを参照。
- [4] <https://www.facebook.com/>  
(2018年2月16日閲覧)
- [5] <https://www.edmodo.com/>  
(2018年2月16日閲覧)

[6] <https://jplang.tufs.ac.jp/>

(2018年2月16日閲覧)

[7] <http://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

(2018年2月16日閲覧)

## 引用文献

- エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト(著)、桜井茂男(監訳)(1999)『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』新曜社
- 川口義一(2016)『もう教科書は怖くない!! 日本語教師のための 初級文法・句型 完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック 第1巻』ココ出版
- 重田美咲、三浦房紀(2011)「工学系大学院留学生の効果的な日本語教育について」『山口大学工学部研究報告』61(2)、33-40
- ソーヤーえこ(2006)「理系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化」『文化と状況的学習実践, 言語, 人工物へのアクセスのデザイン』凡人社、94-124

---

\*東京農工大学国際センター

## UEC 漢字ロードマップの開発

### —語彙先習の観点からの検証—

笠原（竹田）ゆう子\*・中嶋めぐみ\*・三好理英子\*・濱野哲子\*

電気通信大学国際教育センターでは理工系非漢字圏研究留学生のための漢字シラバス、「UEC 漢字ロードマップ」を開発した。「UEC 漢字ロードマップ」は、初級前半の漢字をレベル1とし、レベル7までで700字を学習するためのシラバスである。初級相当のレベル1～3までは、本学のコースで用いている初級日本語教科書の語彙の漢字を配置した。中級相当のレベル4～7は、日本語能力試験N2受験という学習者の目標に配慮して、旧日本語能力試験および基礎理工語彙の漢字から選定した。非漢字圏学習者の漢字学習においては、「語彙先習」が効果的であるとされる。本稿では、「UEC 漢字ロードマップ」の概要を述べ、各レベルの漢字について、その漢字が学習者にとって既習語彙の漢字であるかどうかを検証した。その結果、レベル4までの漢字は、ほぼ「語彙先習」を実現しており、レベル5から7へと進むにしたがって、未習語彙の漢字が増えていることが明らかになった。

キーワード：漢字 シラバス 語彙先習 理工系非漢字圏学習者

#### 1. はじめに

電気通信大学国際教育センターでは、理工系非漢字圏研究留学生（以降、非漢字圏学習者とする）向けの漢字シラバス及びそれに準拠した教材開発に取り組んでいる。西口（2010）は「教育実践上重要なことは、一定の妥当性のある明確な漢字学習のロードマップ（段階的に分けられたシラバス）を明らかにして、それを学習者に提示することと教師間で共有することである。そうすることで学習者も教師も漢字学習の全体的な見取り図を見ることができ、また現状を評価し、今後の学習の指針を得ることができるのである」としている。学習者と教師が到達目標を共有し、現時点での学習がどの段階にあるのかを確認することができるシラバスにしたいと考え、「漢字学習ロードマップ」という名称を筆者も用いている。

本学の非漢字圏学習者は、日本語コース（以降、全学日本語コースとする）で初級を修了した後には専門の学習・研究に集中するため、日本語学習に割ける時間が減少する。研究室では限られた日本人としか接する機会がなく、コミュニケーショ

ンの主たる言語は英語である場合が多い。このような環境下にあつて、彼らの日本語力は滞在期間が長くなっても、なかなか伸びない。一方、彼らの多くは、大学院修了後に日本で就職することを希望しており、日本語能力試験（以降、JLPTとする）の受験を目指している。就職やJLPT受験を考えた場合、漢字は避けられない学習項目である。学習時間に制約がある非漢字圏学習者の漢字教育には、彼らの日本語力レベルに合わせた目標を設定し、必要性の高い漢字を無理のないペースで学習させることが必要である。

筆者は2013年度から「UEC 漢字ロードマップ」の開発に取り組んでいるが、本稿で報告する「UEC 漢字ロードマップ」は、2013～2015年度に開発したシラバス（第一次シラバスとする）を、教材試用の結果（笠原他（2016））に基づいて改訂したものである。第一次シラバスでは、日常生活に最低限必要であると考えられる旧日本語能力試験4級（以下、旧～級のように表記する）及び旧3級の漢字と、旧1、2級レベルの理工系多出漢字（武田（1994）による）を含めた700字を到達目標とし、6レベルに分けた（最も低いレベルを1、高いレベ

ルを6としている) [1]。各レベルは、1学期間(16週)での学習を想定した。第一次シラバス6レベルのうち、レベル3(157字)とレベル4(160字)について教材を試作した。このレベル3及びレベル4の試作版では、漢字自体を学ぶほかに、その課で学ぶ漢字を使用した本文を作り、本文に出てくる語彙から漢字の読み方や意味を類推させることを意図した。実際に、教材を試用したところ、文章で使用された単語は未習のものがほとんどで、学習者は漢字の他に新しい単語を学び、さらに単語の定着がないままに読解を行わなければならない、学習者に大きな負担がかかることがわかった。

また、第一次シラバスでは、上述のように、旧1、2級レベルの漢字から選定する際、理工系多出漢字であるかどうかを重視した。これは、理工系の学習者には専門用語に用いられている漢字の学習が必要なのではないかと考えたためである。しかし、実際には、高度な専門学習、研究活動では、非漢字圏学習者に対しては、英語の用語が用いられる場合が多い。日本語の用語は学習者にとって新たに学ぶ語彙となる。また、学習者の専門はそれぞれ異なっているため、漢字の授業において記憶の手がかりとして学習者に共通に提示するには、日本語の専門用語は適切ではなかった。

非漢字圏学習者の漢字学習においては、既に知っている語彙の漢字であることが、学習の助けとなる。虫明・菅原(2009)は、「語彙先習」つまり、まず、単語を学習してからその表記としての漢字を学ぶことが、非漢字圏学習者の漢字学習の負担を軽減するとしている。

「UEC ロードマップ」へと改訂するにあたっては、レベル1~4までは、「語彙先習」の観点から、全学日本語コースで用いている初級日本語教科書の語彙の漢字を主に配置した。レベル5~7については、初級日本語教科書の語彙の漢字に加え、旧日本語能力試験の漢字、「基礎理工語彙」(次節「2.1 漢字データベース」参照)の漢字から選定を行った。

また、第一次シラバスでは、レベル4の漢字数の多さも問題となっていたため、「UEC 漢字ロードマップ」では、レベル数を一つ増やして7レベルとし、レベル4以降の各レベルの学習漢字数を100字とした。

本稿では、「UEC 漢字ロードマップ」が「語彙先

習」に沿ったものになっているかどうかを検証する。以下、まず、「UEC 漢字ロードマップ」について述べ、上記について、検証方法及び結果を報告する。さらに、これらの検証結果から見えてきた課題について述べる。

## 2. UEC 漢字ロードマップ

UEC 漢字ロードマップの作成に先立って、常用漢字についてのデータベースを作成した。本章では、漢字データベースとUEC 漢字ロードマップについて述べる。

### 2.1. 漢字データベース

常用漢字 2136 字のデータベースを作成し、各漢字について常用漢字番号、音訓、総画数に加え、以下の情報が参照できるようにした。ここで「語彙」は、当該漢字が用いられている単語のことである。

- 1) 旧日本語能力試験の漢字及びその配置級
- 2) 旧日本語能力試験語彙
- 3) 理工系多出漢字
- 4) 基礎理工語彙
- 5) 『日本語で行こう』語彙
- 6) 西口水準及び語彙
- 7) 『BASIC KANJI BOOK VOL. 1』『BASIC KANJI BOOK VOL. 2』漢字及び語彙
- 8) 『留学生のための漢字の教科書中級 700』漢字及び語彙
- 9) 『みんなのほんご 中級1』語彙
- 10) 中学理科教科書語彙

上記、3) 理工系多出漢字は、前述のように、武田(1994)によるものである。武田(1994)は、大学の理工系専門必須基礎科目の理工系専門書に高頻度で出現する漢字 480 字を抽出している。

4) 基礎理工語彙は、日本人が英語で基礎理工語彙を学ぶための資料から、筆者が抽出した語彙である。非漢字圏学習者は、基礎理工語彙について、英語では習得している。また、日本人が学習する理工系英単語は、理工系において世界的にも共通する基本語であろうと考え、以下三種の資料から抽出した。

①『東工大英単 科学・技術例文集』東京工業大学著、研究社、2011

②『聞いて覚える理系英単語 キクタンサイエンス 情報科学編』平井通宏著、アルク、2012

③『聞いて覚える理系英単語 キクタンサイエンス 工学編』佐藤洋一著、アルク、2012

上記①については、留学生の専門基礎教育担当教員が、英単語の日本語訳及び例文の中から、本学での専門学習に必要、あるいは使用すると考えられる単語を抽出した。②、③については、巻末の日本語索引から、漢字が用いられている単語を抽出した。このように①～③から抽出した語彙を「基礎理工語彙」とした。

5)『日本語で行こう』語彙は、本学の初級コースで用いている日本語教科書『日本語で行こう Vol. 1』及び『日本語で行こう Vol. 2』の語彙である(以降、『日本語で行こう Vol. 1』、『日本語で行こう Vol. 2』を『日本語で行こう』とする)。

6) 西口水準及び語彙は、西口(2010)の「漢字学習ロードマップ」のそれである。西口(2010)は、旧2級漢字1023字を以下のように6つの水準に分け、各漢字に旧日本語能力試験のシラバスの語彙を挙げている。

第1水準：旧4級漢字103字

第2水準：旧3級漢字181字(累計284字)

第3水準：旧2級漢字のうち、旧3級熟語および、仮名では判別の難しい旧3級語彙を表記するために必要な231字(累計515字)

第4水準：旧3級漢字を含む2級熟語を漢字表記するために必要な旧2級漢字177字(累計692字)

第5水準：第1～4水準及び第6水準以外の漢字218字(累計910字)

第6水準：代表語彙の使用範囲が限定されている漢字及び仮名書きでも判別に支障のない訓読みの動詞、形容詞の漢字113字(累計1023字)

上記の漢字データベースの情報を参照し、漢字選定作業を行った。

## 2.2. UEC 漢字ロードマップ

ここでは「UEC 漢字ロードマップ」の漢字選定方法、漢字配置について述べる。

前述のように「UEC 漢字ロードマップ」は7レベルで、各レベルの漢字数は、以下の通りである。

レベル1：54字           レベル2：89字

レベル3：157字       レベル4～7：100字

資料1に「UEC 漢字ロードマップ」一覧を示した。

### 2.2.1. レベル1、2

レベル1、2は『日本語で行こう』と並行して学ぶ漢字であり、既に教材を開発し、使用している。

### 2.2.2. レベル3

レベル3では『日本語で行こう』の語彙を表す漢字から157字を選定した。前述のように第一次シラバスでは提示した語彙が未習であることが問題となっていた。レベル3以降のクラスは、初級コースを終えた非漢字圏学習者が、大学院での研究生生活を行いながら、日本語学習を続けることが想定されている。彼らが授業に割ける時間は一週間に1～2コマ程度である。このような状況から、初級修了後に習得語彙数はほとんど増えないことが観察された(笠原他(2016))。筆者は「1.はじめに」でも述べたように、既習語彙からのアプローチが最適であると考え、レベル1、2で取り上げられなかった『日本語で行こう』の語彙のうち、漢字で表記される場合が多いと考えられるものを選んだ。漢字学習と共に、語彙の復習を行うことも意図した。

第一次シラバスでの試作版教材では1課毎に15～18字の漢字を配置し、10課構成としたが、1課につき15～18字という字数は学習者の負担が大きかった。そこで、今回の改訂では教材の課毎の配置漢字を11～12字に減らし、14課分に構成し直すことにした。実際に試用した漢字教材の構成は以下の通りである。

A:漢字教材本冊

1. 見出し(画数、4種類のフォント、部首)
2. 読み方(訓読み、音読み、及び単語)
3. 意味(英語) 4. 書き順 5. 練習用マス

B:付属教材

1. フラッシュカード 2. 例文シート(学習漢字の語彙を含んだ例文)

### 2.2.3. レベル4

レベル4の選定に当たっては『日本語で行こう』で学んだ既習語彙に加え、西口第三水準を参考にし、『日本語で行こう』で扱われなかった旧4、3級の語彙の漢字を選んだ。第一次シラバスの試作版教材では課毎に13～14字の漢字を配置し、12課構成としたが、漢字の多さに加え、語彙がほと

んど新出であることが学習者の負担となった。今回の改訂に基づき、教材は課毎に10字を配置し、14課の構成とする予定である。教材の構成はレベル3を踏襲する。

#### 2.2.4. レベル5~7

レベル5から7までの漢字選定は以下の手順で行った。最初に『日本語で行こう』の語彙漢字・基礎理工語彙漢字・西口第三水準漢字のうち2つ以上の資料の重なりがみられる漢字として319字を抽出した。

基礎理工語彙は2.1で述べたとおり、学習者が英語で習得しているであろう理工系基礎語彙である。学習者は基礎理工語彙の意味概念を知っていると想定した。漢字学習に際しては、この既有知識が活用できるのではないかと考えた。

次に、319字について漢字と共に提示できる語彙をリストアップし、300字を選定した。これらの300字をレベル5、6、7に段階化した。

レベル5については、学校生活、レポートなど留学生生活で用いる語彙を選択し、造語成分となる漢字も取り上げた。レベル6については本学の留学生が実際に行う言語行動を考えて選定した。研究や学校生活の他に、就職活動や地域団体から求められて行う自国紹介等のスピーチを想定して語彙を選択した。レベル7については研究で用いられる一般学術用語や理工系基礎語彙を考慮し、100字を選んだ。

#### 2.2.5. アクティビティ

レベル3~7の漢字選定の過程において、生活を送る上で認識できることが学習者の助けになるであろう漢字の扱いが問題となった。これらの漢字は他の市販の漢字教科書では取り上げられているものが多い。また、今回の選定では既習語彙を中心に考えたため、漢字学習に必要となる、漢字語彙の造語成分、部首、傍になる漢字等を学ぶ部分が不足していると思われた。そこで、これらの漢字を、学習項目としての漢字とは別に扱うことにした。資料1で「アクティビティ」として示している。

### 3. 語彙先習の検証

本章では、「UEC 漢字ロードマップ」の漢字選定

が「語彙先習」の方針にかなっているかを検証する。

#### 3.1. 検証の方法

本節では、「語彙先習」の検証方法について述べる。

全学日本語コースで非漢字圏学習者の日本語授業の履修過程を表1のように想定した。

レベル1、2はそれぞれ『日本語で行こう』に並行して学習する。レベル3では『Weekly J』（秋山信子他著、凡人社、2012）、レベル4では『留学生の日本語①読解編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会編著、アルク、2015）を日本語教科書として使用する。レベル4の修了までに4学期2年が経過する。レベル5以上は、学習者の時間的制約から、一つの市販の日本語教科書を、学期を通して学習する形態がとれないため、既習教科書としてはレベル4と同様であるとした。

検証にあたっては、まず、表1にある『日本語で行こう』、『Weekly J』、『留学生の日本語①読解編』の語彙リストを整理した。全学日本語コースでは、授業において教科書掲載の語彙リストを中心に語彙を導入し、練習用の副教材を使用して語彙を学習した後、宿題やクイズを課している。このような「授業で学習したことのある語彙」を「先習した語彙」として考えた。『留学生の日本語①読解編』は、教科書に記載されている語彙リストに挙がっていない語彙についても、別途、本学で作成した語彙の教材プリントを使用して、語彙指導を行っている。『留学生の日本語①読解編』の語彙として、その教材プリントで取り上げている語彙を追加した。

表1 日本語授業の履修過程

学期	日本語教科書	UEC 漢字 レベル
第1学期	『日本語で行こう Vol.1』	1
第2学期	『日本語で行こう Vol.2』	2
第3学期	『Weekly J』	3
第4学期	『留学生の日本語①読解編』	4
第5学期	—	5
第6学期	—	6
第7学期	—	7

語彙リストの整理に当たっては、各教科書で品詞の扱いが異なる単語は、旧日本語能力試験の語彙シラバスに準拠して、統一をした[2]。

上記の語彙リストを用い、レベル 1~7 までの各漢字について、「先習した語彙」があるかどうかを確認した。例えば、「約」という漢字の場合、漢字自体はレベル 4 で学習する。レベル 4 では、『日本語で行こう』及び『Weekly J』が学習済みである。『日本語で行こう』の語彙に「約～」があり、『Weekly J』に「節約」がある。また、「約束」「予約」は『日本語で行こう』、『Weekly J』の両方の語彙リストに挙がっているため、「約」の語彙は学習済み、つまり、「語彙先習」になっている。

上記の想定の下、各レベル配置の漢字について、レベル 1~3 は『日本語で行こう』の語彙、レベル 4 は『日本語で行こう』と『Weekly J』、レベル 5 以上については『日本語で行こう』と『Weekly J』及び『留学生の日本語①読解編』の語彙との対照を行った。

### 3.2. 検証結果

表 2 は、上記の調査の結果を示したものである。

レベル 1~3 では、語彙未習の漢字は各レベル 1 字のみで、98~99% が語彙先習となっている。レベル 4 以降、レベルが上がるにつれて、語彙先習漢字数が減り、レベル 7 では 65% である。全体では、700 字中 620 字、88.6% が語彙先習の漢字であった。

レベル 1~3 及び 4 では語彙先習の漢字がほとんどである。これは、選定の際に『日本語で行こう』の語彙に準拠したためである。レベル 5~7 では語彙先習の割合が下がり、対策が必要であると言える。

### 4. おわりに

上記の結果から、「UEC 漢字ロードマップ」はレベル 1~3 までは語彙先習が概ね実現できていることが分かった。一方、レベル 4~7 ではレベルが上がるにつれて、語彙が未習の漢字が増えていることが分かった。

今後は、これら未習語彙の漢字をどのように扱うかが課題となる。

レベル 1~3 で未習漢字となっている「力、夕、弱」は『日本語で行こう』に「力、夕方、弱い」

表 2 先習・未習語彙漢字

レベル	配置漢字数 (a)	語彙先習		語彙未習	
		漢字数 (b)	% (b/a)	漢字数	未習漢字
1	54	53	98.1	1	力
2	89	88	98.9	1	夕
3	157	156	99.4	1	弱
4	100	94	94.0	6	区技進堂民因
5	100	87	87.0	13	提講復締秀 演薦充登則 幸翌倍
6	100	77	77.0	23	抽功基礎企 雇責任担延 添宛削源製 億兆異含扱 求疑互
7	100	65	65.0	35	軸照略肯否 著訂補傾討 慮章層磁給 支況誤装庄 改距振列抑 央积精処策 像隔侵管障
計	700	620	88.6	80	

等の語彙を追加することで解決ができるだろう。

一方、また、レベル 4 以降の未習漢字については語彙先習が成立するように漢字の学習よりも前の学期の日本語授業の中で、語彙が導入できるようにコース構成や授業内容等を見直していく必要があるだろう。

また、今回の検証過程において、レベル 1~3 で既習語彙がその漢字の代表的な語彙ではないもの、または固有名詞であるものが数例見られた。例えば、「不」は『日本語で行こう』の既習語彙は「不動産」である。この「不」はむしろ「不便」といった初級語彙で提示するのが適当であろう。また、「浅」の既習語彙は「浅草」である。しかし、固有名詞よりも初級語彙に相当する「浅い」のほうが汎用性があり、適切であろう。このような例を改めて精査し、学習漢字の基本的字義で使われている語彙を『日本語で行こう』語彙に加える必要がある。

以上のような日本語コース全体を通した漢字と語彙のシラバスの整備、およびシラバスに基づいた教材開発に今後取り組んでいきたい。

### 付記

本報告は平成 26~28 年度科学研究費補助金・

基盤研究 (C) 「理工系非漢字圏学習者のための漢字ロードマップの作成と教材開発」(課題番号: 26370596 研究代表者: 竹田ゆう子) による成果の一部である。

## 注

- [1] 旧日本語能力試験の漢字シラバスを用いたのは、現在の JLPT はシラバスが公開されていないためである。
- [2] する動詞は名詞として扱う/い形容詞の副詞形は「〜い」の形で採用する等。

## 引用文献

- 笠原(竹田)ゆう子、中嶋めぐみ、三好理英子(2016) 『UEC 漢字 300』『UEC 漢字 460』の開発と試用』、『多摩留学生教育研究論集』10 37-43
- 笠原(竹田)ゆう子、中嶋めぐみ、三好理英子、濱野哲子(2017) 「非漢字圏理工系研究留学生の語彙習得の実態に合わせた漢字シラバスの検討」、『日本語教育方法研究会誌』Vol. 23、No. 2、32-33
- 武田明子(1994) 「非漢字圏から来た理工系留学生への漢字教育」、『異文化間教育』第 8 号、77-95
- 西口光一(2010) 「漢字学習ロードマップと漢字マスター学習システムの開発」、『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第 14 号、21-31
- 虫明美喜・菅原和夫(2009) 「漢字学習における「語彙先習」の効果」、『日本語教育方法研究会誌』Vol. 16、No. 1、48-49

---

\*電気通信大学国際教育センター

資料1 UEC漢字ロードマップ

<b>レベル1 (54字)</b>
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万 円 私 先 生 学 留 国 行 来 人 日 本 大 中 小 月 火 水 木 金 土 年 山 川 雨 車 門 田 力 男 女 子 食 飲 言 語 話 読 休 買 会

<b>レベル2 (89字)</b>
口 目 手 足 耳 心 今 何 時 分 午 前 後 毎 週 間 東 西 南 北 上 下 左 右 出 入 見 立 書 聞 帰 元 気 名 有 好 高 安 京 都 海 道 調 布 市 電 通 信 住 使 作 持 答 質 問 新 古 研 究 科 部 駅 病 院 図 館 店 公 園 所 花 屋 家 遠 近 朝 昼 晚 夕 方 教 室 勉 強 宿 題 英 多 少

<b>レベル3 (157字)</b>			
カテゴリー	漢字	カテゴリー	漢字
色	黒青赤白色茶黄	卒業	卒論文必要
季節	春夏秋冬暑寒	メール	届送連絡伝返
天気	天降悪台風	相談	相談配実変注
家族	父母兄姉妹弟族	交通	交便利不止動
趣味	音楽写真映画旅料理物散歩	音読み、訓読み認識	説明急切親
日常動作・できること	速走覚歌漢字運転乗自	動詞反対語	貸借売開閉
一日の生活	起寝早遅計夜	形容詞反対語	暗弱低長短軽重熱冷同違
残念なこと	死忘残念消	日記	友案内外記
家族紹介	社結婚員仕事銀勤働忙去	待ち合わせ	場建曲着待地
発表	発表準備練習決	思考に関する動詞	知思考意
授業	授業始終半校	電通大専門	情報工専攻
試験	難簡単試験合格	病気	痛医者薬
★アクティビティ			
トピック	漢字	トピック	漢字
住所を書く	県区町府村	食料品	肉魚飯牛豚鳥野菜
駅表示	特急快普各停	体	体頭顔首歯鼻

<b>レベル4 (100字)</b>			
カテゴリー	漢字	カテゴリー	漢字
会社来客	失礼約束客予定務	社会	無政育経済歴史
学校	区活当法席欠退点	食堂	季節空光値段堂野
形容詞	広狭正太細浅深暖温涼厚薄危険	世界	反対世界民飛際全
結婚式	受付主両洋服紙	接辞的に使う漢字	性代用式以度回最
工業	特別機械技術材産	病院	体階払番号側次初
自他動詞	進落割壊治集取続	レポート	直化果原因数由選
★アクティビティ			
トピック	漢字	トピック	漢字
日常生活の表示	洗押引暖房冷送除湿自	生き物	犬馬羊虫猫声
日付の表現	昨再曜	人名	森林
味	味苦甘辛塩酸	鉄道	鉄袋品線渋谷葉原

レベル5 (100字)			
カテゴリー	漢字		
レポート・学術	指導提成績複講義確認資他復例関係絶稿締解		
学校生活・サイン	議容刻優秀良可助履奨期演限修士課程博面		
	接能就職推薦状参加告減増禁非常興味趣		
日用品	雑誌携帯種類充		
留学	証登録在現願健康寮規則整順属荷		
一般社会 (スピーチ)	価挙賛		
和語動詞・形容詞	置慣困燃換静厳詳鮮幸		
造語成分	再的末翌未倍第満		
★アクティビティ			
トピック	漢字	トピック	漢字
生活費	代費賃	施設	局役管港到

レベル6 (100字)			
カテゴリー	漢字		
レポート・学術	観察具抽象敗功基礎般完析位識許		
就活	了協志望適組採系視企雇責任担頼免申込		
漢語動詞・形容詞	拡縮査算継延張		
実験	均比較率		
メール	件感謝添更宛		
コンピュータ・機械	保存削除源個検索		
自国の説明	積達展製品輸億兆島		
時事・ニュース	故放極防影響環境平被害昇破然		
和語動詞	異等得含扱求過述測疑困激流並互移守及与		
★アクティビティ			
トピック	漢字	トピック	漢字
部首になる漢字	貝石竹糸米	旁になる漢字	及青寺

レベル7 (100字)			
カテゴリー	漢字		
レポート・学術	仮座標軸照省略背景覧共総各肯否著範逆根拠序訂評補傾摘討慮章向層角負形横縦周線磁		
流通・経済	供給営収支益況統		
実験	示素誤差固液応装圧改距振幅列抑波項条央積離和		
コンピュータ・機械	蔵護符器命令秘密領域操制御精効処路型策設構造築像判断隔侵管障態		

## 電気通信大学における国際科目

### — UEC Academic Skills I (Computer Literacy) —

CHOO Cheow Keong\*

電気通信大学は学生の国際化と英語力強化を図るため、1997年より英語による国際科目を開講している。国際科目は、海外の協定校からの短期交換留学生にも提供されている科目で、正規学生と短期交換留学生の双方に交流と学び合う機会を提供している。UEC Academic Skills I (Computer Literacy) は、電気通信大学の学域（学部）で開講されている国際科目の1つであり、パソコンのスキルを習得するとともに正規学生と短期交換留学生とのコミュニケーションを図り、正規学生の海外留学を促進する環境も提供している。本稿では、2014年の国際科目の再編の際に、内容を改編したUEC Academic Skills Iのカリキュラム内容を報告し、学生による授業評価の結果を分析し、問題点と将来に向けての改善点を検討する。

キーワード：短期交換留学生 国際科目 UEC Academic Skills JUSST Program

#### 1. はじめに

電気通信大学は、情報理工学を核とした科学技術分野において、高度な専門能力、幅広く深い教養を授ける教育を行い、国際社会で活躍できる創造力と実践力のある研究者・技術者を育成してきた。2013年には、本学は文部科学省の「研究大学強化促進事業」の支援対象機関（22機関）の1つに採択されたことを受け、大学の教育研究の国際化基盤を強化し、それを支える体制を整備してきた。この理念と目的を達成し実現していく上で、英語による授業の「国際科目」は大きな役割を果たしている。これらの科目を通じた正規学生[1]と海外協定校からの短期交換留学生（以降、短期留学生）の交流によって、正規学生の海外短期留学も促進されている。

本稿では、2014年にカリキュラムを改編し、実施してきた国際科目「UEC Academic Skills I」の内容と学生による授業評価について述べる。

#### 2. 電気通信大学の国際科目について

電気通信大学の国際科目の変遷を図1に示す。

1997年に海外協定校からの短期留学生（学部と大学院）に対する英語による授業が開講されるようになった。これらの授業は、1999年には正規学生も聴講が認められ、短期留学生とともに参加できるようになった。2002年からは、所属学科と担当教員の了解を得られた場合のみ修得した単位が総合文化科目（英語演習）か、上級科目か、共通単位として認められるようになった。

その後、大学の国際化の流れの中で、これらの科目は2004年に、「国際科目」として開設されるようになり、その中でも国際交流推進センター（現国際教育センター）が提供する英語による科目は正規の科目として学習要覧に載り、1・2年次で修得した場合は言語文化演習科目の単位となり、3・4年次で修得した場合は上級科目の単位となった。一方、それ以外の専門系の国際科目は、ほぼ自由科目としてしか認められなかった。

2014年に、正規学生の履修モチベーションを上げるため、学部に提供される専門分野の国際科目の修得単位も上級科目の単位か、共通単位として認められることになった。さらに国際科目は1) 「アカデミック・コミュニケーション科目」、2) 「理工系一般科目」、3) 「理工系専門科目」という

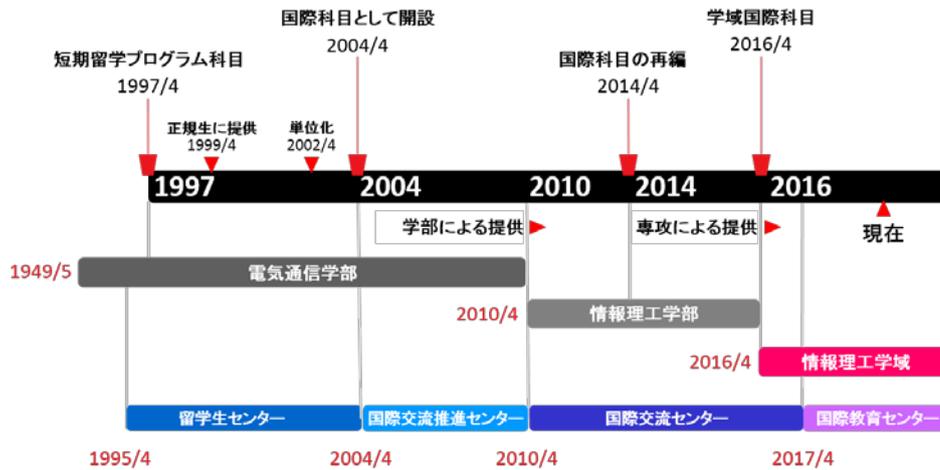


図1 国際科目の変遷

3つの区分に分類され、全ての国際科目が学習要覧に載ることとなった。2016年に、本学の4学科あった学部が3類からなる学域に改組されたが、国際科目は2014年から提供されてきた専門分野における科目数を維持している。

### 3. UEC Academic Skills I (Computer Literacy)

UEC Academic Skills 科目は、国際科目の中の理工系一般科目に分類され、1) UEC Academic Skills I (Computer Literacy)、2) UEC Academic Skills II (Information Literacy and Research) と3) UEC Academic Skills III (Publishing Literacy and Research) の3科目から構成されている。本3科目は、正規学生と短期留学生との交流(国際交流)、グローバル研究者育成に向けた科目として、国際教育センターが開講している。なお、これらの科目は、短期留学生の中でも Japanese University Studies in Science & Technology (JUSST) プログラムの学生にとっては必修科目でもあり、研究活動に必要なアカデミックスキルが身に付けられるように構成されている。

UEC Academic Skills I は、2014年の国際科目の再編の際に、カリキュラム内容を改編した。それまでの内容は、情報処理機器のワークステーションやUNIX環境におけるコンピュータの利用法であった。2014年度にさらに研究論文作成・発表に必要なコンピュータ・スキルやツールの使い方を加えた。

#### 3.1. 主題および達成目標

UEC Academic Skills I は、情報社会の基本的な倫理と法遵守の理解から始まり、Unix システムの基本操作、Latex による研究ドキュメント作成やホームページ制作までを学習する。英語で行われる授業を通して、研究に必要なとなるコンピュータに関する基礎的な知識やスキルを身に付けることが目標である。

#### 3.2. 授業内容とその進め方

UEC Academic Skills I は全15回で、図2に示すように主に5つのパートから構成されている。パート1から4に関しては、本学の必修科目である「コンピュータリテラシー」とほぼ同じ内容で展開する。パート1は、情報ネットワークを利用するにあたって、情報倫理教育及び情報セキュリティポリシーについて周知を徹底する。パート2は、Unix システムの基本的な概念と主なコマンドの使い方(ファイルシステム基本コマンドとテキストエディタ vi) を学習する。パート3は、理工系の研究論文執筆の標準ツール「Latex」の知識と文書整形技法(表、図形、数式)を学ぶ。パート4は、WEB ページ製作の基礎である HTML (Hyper Text Markup Language) や CSS (Cascading Style Sheets) 文書の基本的な構造や記述ルールについて学ぶ。また、パート5のグループワークは、2014年のカリキュラムの改編の際に新たに取り入れた内容である。なお、本授業は対面授業だが、教材(授業のスライドや補助資料)の提示と授業の予習復習のために Moodle システムを導入した。

授業は、コンピュータ実習室を使用する。進め方は、最初の30分は毎回のテーマに沿って代表

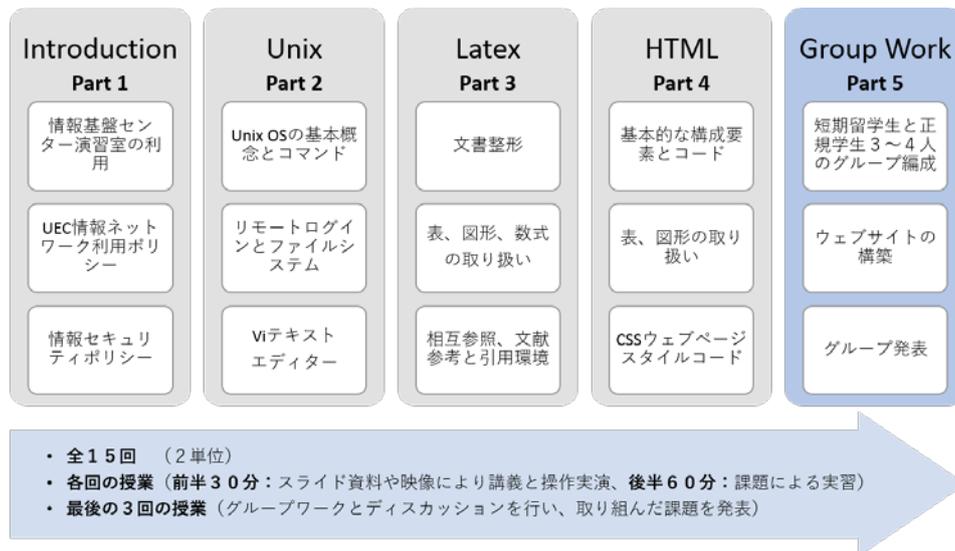


図2 UEC Academic Skills Iの構成と実施内容

的な例についてパワーポイントを用いて講義し、実際の操作を実演して見せる。残りの60分は学生が課題を実習する。なお、最後の3回分の授業では、グループによるプロジェクトを行う。学習した技術や知識を活用して、WEBサイトをデザインし、マルチメディアを利用して自分たちのコンテンツを作成し、WEB上で情報を公開する。ここでは、正規学生と短期留学生の間の交流と学び合いを通して、自分達で自主的に情報発信に関する知識を修得していくことを目指す。

#### 4. 授業評価アンケートについて

電気通信大学では学生による授業評価が行われているが、短期留学生はその対象となっていない。そのため、履修学生の多くが短期留学生であり、正規学生があまりいない国際科目に関しては、学生による授業評価調査がほとんど行われていないのが現状である。しかしながら、海外協定校からの短期留学生は、様々なレベル及び異なる教育背景を持っているため、履修した科目に対してまた違った角度からの意見を持っているはずであり、それを把握することは授業の改善の参考になる。そのため、UEC Academic Skillsの科目では、2016年から独自に学生授業評価の調査を実施してきた。

実施した学期は、現在のところ2016年春学期から2017年春学期までの計3学期で、11校の協

定大学からの延べ33名の短期留学生がUEC Academic Skills Iを履修し、授業評価アンケートに回答した。対象短期留学生の基本情報を資料1に示す。所属課程の比率では、学部の短期留学生は2016年春学期の33%から2016年春学期の54%に、そして2017年春学期には64%と増加し、大学院生との比率が逆転している。

本授業の授業評価アンケートは、本学の学生授業評価と同じ内容を英語に翻訳したもので、本授業で導入しているMoodleシステムのアンケート機能を利用してWEB上で行った。アンケート内容は大きく4つの区分、①学生自身の取り組みに対する自己評価項目(設問1~4)、②授業の教授方法に対する評価項目(設問5~9)、③授業の内容とカリキュラムに対する評価項目(設問10~12)と④授業に対する意見と感想の自由記入欄(設問13~15)から構成されている。それぞれの設問に対する回答選択肢は設問10と自由記入欄を除き、「1. そう思わない、2. あまりそう思わない、3. どちらとも言えない、4. ややそう思う、5. そう思う」の5段階の順序尺度を用いて、数値データとして収集した(資料2と資料3を参照)。

##### 4.1. アンケートの集計結果

アンケートの各設問に対する学期別の評価平均点を図3にまとめた。さらに、白丸・実線は3学期の平均である。

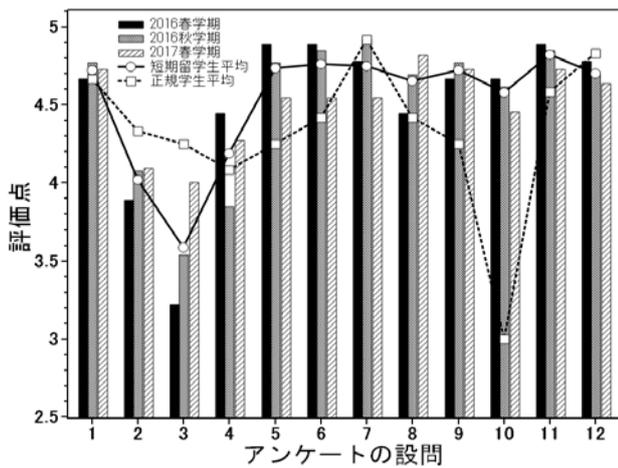


図3 学期別の各設問に対する評価平均

学生自身の取り組み（設問1～4）の全体的な平均評価点は4.2と良好で、学生自身は授業に積極的に取り組んでいると考えられる。設問1の学生の出席率の結果を見ると、全体的に4.7以上の高い出席率を示している。設問2の「平均学習時間」と設問3の「授業中不明だった点を質問や自分で調べることにより補ったか」の評価点は、学期を追うごとに増加傾向が見られ、学習意識が高い学生が増加してきているといえる。なお、「授業で知識や技能などが身に付いたか」という設問4に対しては、評価が学期ごとにばらついていて学生の所属（課程、学年、出身大学）との関係は見られなかった。

授業方法に関する教師の授業準備、説明仕方、声の大きさ、スライドなどの読みやすさ、教材の適切さを問う設問5～9と授業の内容とカリキュラムについて問う設問10～12に対する評価の平均は、それぞれ4.7と全体的に高く評価されている。シラバスの充実とシラバスに沿った計画的な講義が提供・実施されているといえる。しかしながら、各学期の平均評価点は、スライドなどの読みやすさと教材の適切さを問う設問8と設問9を除いて、やや低下傾向を示している。また、設問10の「授業を進める速度」に関しては、「1. 遅かった、2. やや遅かった、3. ちょうどよかった、4. やや速かった、5. 速かった」という5段階の順序尺度を用いているが、「やや速い」と「速かった」との評価が多く見られた。その理由は、学部学生の増加に関係していると考えられる。学部学生の増加に伴い、学生の学習速度に配慮し、Moodleなどを効果的に利用しながら、学生に予習と復習を促すことと、Unixシステム未経験者に適

切な学習内容を設定することで改善していきたい。

設問12の「総合的に見て、この授業はよかったと思うか」は、授業に対する総合評価と考えられるが、設問12と他の評価項目（設問1～11）との関連性を見るため、評価項目の相関係数を求めた（表1）。なお、設問10は順序尺度が異なるためこの分析から外した。

表1 総合評価と各設問の相関係数

設問項目	相関の強さ	相関係数	評価点平均
Q3_不明点を自分で調べて補ったか	$0 <  r  \leq 0.2$ 殆ど相関なし	-0.17	3.59
Q2_予習・復習などの学習平均時間か		0.13	4.00
Q1_授業にどれくらい出席率したか	$0.2 <  r  \leq 0.4$ 低い相関あり	0.22	4.70
Q4_技術を身に付けることが出来たか		0.35	4.14
Q8_スライドの文字の読みやすかったか	$0.4 <  r  \leq 0.7$ 相関あり	0.49	4.62
Q7_声は良く聞き取れたか		0.58	4.73
Q11_シラバスに沿った授業が行われたか		0.67	4.78
Q6_授業の説明が理解しやすかったか	$0.7 <  r  < 1.0$ 高い相関あり	0.71	4.70
Q5_授業はよく準備・整理されていたか		0.73	4.62
Q9_教材（ウェブなど）は適切でしたか		0.77	4.68
平均		0.45	4.46

この結果からは、授業に対する総合評価（設問12）は、学生自身の取り組みと出席率（設問1）と「技術などを身に付けることが出来た」（設問4）と低い相関に留まったものの、授業の方法（設問5～9）と授業内容（設問11）と相関があり、特に授業の準備と整理（設問5）、授業の説明（設問6）と授業の教材（設問9）と相関が高いことが分かった。本授業は、出席して授業説明を聞くだけで分かるように設計しており、課題も授業時間内に完成できるように考えられている。そのため、「学生自身の取り組み」（設問1～4）との関連性が低いという結果が出たと考えられる。

相関係数と各設問の評価点との関連性を見るために、表1の結果をCS分析図としてプロットしたのが図4である。図4の各領域AからDの説明を表2にまとめた。図4のC領域から、本授業を短期留学生が満足するものにするために、引き続き高水準の「授業方法」と「授業内容」を維持することが必要であることがわかる。

#### 4.2. 正規学生の集計結果との比較

本授業科目は、本学の正規学生も履修している。2015年春学期に1名、2016年春学期に1名、2016

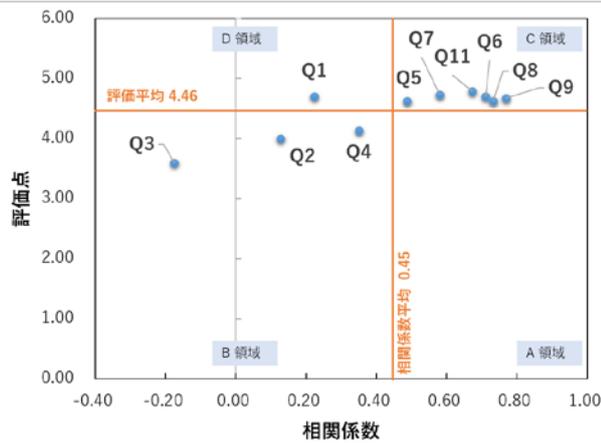


図4 各設問の相関係数と評価点の散布図

年秋学期に3名、2017年春学期に1名の正規学生が履修した。比較するために、これら6名の正規学生に対して行った授業評価の平均を図3に白四角・破線で併記した。

正規学生の①自身の取り組み(設問1~4)、②授業方法(設問5~9)、③授業の内容とカリキュラム(設問10~12)に対する評価の平均も、設問10を除き、それぞれ①4.3、②4.4と③4.7であり、短期留学生の結果とほぼ一致している。設問2の「1週間の学習時間」は、短期留学生の結果とほぼ同じ(1時間~2時間程度)であるが、授業を進める速度に関しては、平均が3で「ちょうどいい」という結果である。その理由は、正規学生はUnixシステムに対する基礎知識を持っていることにあると考えられる。設問12の授業に対する総合評価については、平均4.8でこれも短期留学生とほぼ同じ高い評価を得ている。

参考までに、電気通信大学大学教育センターは、授業評価の全体的な結果をまとめているが、2015年度前学期の正規学生の「国際科目」に対する総合評価[2]でも、設問12は4.7であり、他の区別の科目より高い評価を得ている。短期留学生の総合評価(3学期間の平均)も4.7であり、短期留学生も正規学生も高い満足度を得ていることがわかる。

#### 4.3. 意見や感想の自由記述欄について

授業評価には、記述式の自由記入欄があるが、その集計結果を表3に示す。この集計結果(設問

表2 相関係数散布図の説明

領域	説明
A領域(最優先改善エリア)	重要度は高く、評価が低い領域。最優先で改善が必要である。
B領域(改善エリア)	重要度は低く、評価も低い領域。重要度が低いので最優先ではないものの、何らかの改善を行うと評価の改善へつながる。
C領域(重点維持エリア)	重要度が高く、評価も高い領域。現状は満足度が高いので問題ないが、満足度が低下すると総合評価も低下してしまう可能性が高いので、高い評価水準を保つことが必要である。
D領域(現状維持エリア)	重要度が低い一方、満足度が高い水準で保たれている領域。評価は高いので、現状を維持すれば十分である。

13と15)からも「研究や勉学に役に立つ技能や知識を学習できた」、「授業の改善すべきところはない」、「良かった」などというおおむね授業満足度が高い評価が得られ、学習目標は達成されていると考えられる。履修人数は少ないが、正規学生からも、「英語による講義を受講して良かった」、「短期留学生と交流できて良かった」という回答が得られた。

授業の改善すべき点(設問14)に関しては、「HTMLやLatex以外にも役に立つツールを教えてください」、「コマンドライン以外の最新のエディタも使ってみよう」との意見が見られた。しかし、本授業は、勉学や研究を遂行するために必要とされる一番基本的なコンピュータ知識とツールを習得するのが趣旨である。そして、高度な内容はUEC Academic Skills II (Information Literacy and Research)のカリキュラムに組み込まれおり、そこでスキルアップを図ることができる。その点について、UEC Academic Skills Iの授業でもより情報を与えていきたい。

#### 5. まとめ

本稿では、電気通信大学における国際科目のUEC Academic Skills Iの授業内容と学生による授業評価について報告した。

今回の学生による授業評価の分析から、短期留学生も正規学生もUEC Academic Skills Iの授業に対して高い満足度を得ていることがわかった。しかしながら、学生の所属課程(学部、大学院)

表3 授業評価の自由記入欄の集計結果

13. この授業のよかった点について記述してください。		回答数	身分
1	国際科目は少ないのでいい経験だった	1	正規学生
2	英語ができなくて不安でしたが、一緒にプレゼンができるくらいには留学生と交流ができてよかった	1	
3	授業で学習した技能、知識やツール・ソフトウェア(html, Latex)などは、研究、学習や論文作成に非常に役に立つ	17	短期交換 留学生
4	授業の内容が面白く、よく構成されている	5	
5	少人数のクラスで、教員とティーチングアシスタント(TA)の説明や対応がよく、質問しやすい環境である	3	
6	授業中のグループワーク(PBL)は、チームの力によって課題を解決して、知識を身に付けられた	3	
7	授業のスライドやウェブページ(Moodleページ)は、非常に分かりやすくて役に立った。	2	
8	毎週の宿題の量はそれほど多くはないが、内容を理解するには役に立った	2	
9	全部よかった	1	

14. この授業について改善すべきと思う点について記述して下さい。		回答数	身分
1	回答無し	0	正規学生
2	良かった。改善必要なし	3	短期交換 留学生
3	研究に有用な他のソフトやツール(解析、描き、グラフなど)も教えてほしい	3	
4	授業に使ったRemote Loginソフトや宿題提出のシステム(Moodle)は、たまに通信不良が発生する	2	
5	コマンドラインではなく、他のエディターやLatexコンパイラを教えてください	2	
6	日本人学生ともっと交流したい	1	
7	授業のWEBページやスライドは、たくさんの情報を提供していて役に立つが、自分が必要な情報を見つけるのが大変でした	1	
8	授業に対する理解を確かめたいため、宿題をもっと詳しくフィードバックしてほしい	1	
9	HTML特にCSSについて、もっと説明してほしい	1	

15. 答えきれなかったことや感想があれば記述して下さい。		回答数	身分
1	朝1限目はつらかったけど履修してよかったです。	1	正規学生
2	良かった、とても良い勉学環境である、改善必要なしなど	5	短期交換 留学生
3	授業が役に立った	2	
4	大学院学生なので、既に勉強した内容である	2	
5	学習した内容の応用(もっと深く)に関して、もっと教えてください	1	
6	宿題をもっと詳しくフィードバックしてほしい	1	
7	復習のため、授業のスライドなどをプリントしてほしい。	1	
8	FEDUのWEBサーバーにアップロードした自分のWEBページは、学外からは確認できない	1	

や学習背景の違いに対応した適切な学習内容の改善が求められていることもわかった。

また、正規学生からは「短期留学生と一緒に受講し、交流ができて良かった」という回答を得ている一方、授業を履修する正規学生の数は短期留学生に対して少ないため、短期留学生からは日本人学生とあまり交流できないという不満も寄せられている。この問題は、本授業のみならず、本学の国際科目全体の課題であり、引き続き正規学生の履修者数を増やす方策の検討が必要である。

#### 注

[1] 学位取得課程に在籍している日本人学生と留学生

[2] 本稿の執筆時点では入手できた最新の情報

#### 引用文献

電気通信大学「学部(学域)学修要覧」(平成9年から平成29年)

電気通信大学シラバスデータベースシステム「20

17年後期 UEC Academic Skills I (Computer Literacy) シラバス」(最終閲覧日: 2018年2月28日) [http://kyoumu.office.uec.ac.jp/syllabus/2017/31/31\\_21017101.html](http://kyoumu.office.uec.ac.jp/syllabus/2017/31/31_21017101.html)

CH00 Cheow Keong 「UEC Academic Skills I (コンピュータリテラシー) 授業の Moodle サイト」(最終閲覧日: 2018年2月28日) <http://www.fedu.uec.ac.jp/skills>

CH00 Cheow Keong (2015) 「Moodle を活用した留学生用(安否確認システム)の構築と運営」『多摩留学生教育研究論集』10号、PP. 23-29

電気通信大学「大学教育センター」学年度報告書(平成21年から平成27年)(最終閲覧日: 2018年2月28日) [http://www.edu.uec.ac.jp/act\\_report\\_year\\_repo.html](http://www.edu.uec.ac.jp/act_report_year_repo.html)

\*電気通信大学国際教育センター

資料1 授業評価の対象短期交換留學生概要

設問	質問	回答	項目	2016年度前期			2016年度後期			2017年度前期			集計						
				人数	割合	計	人数	割合	計	人数	割合	計	人数	割合	計				
a 学生の情報		1	北京郵電大学 BUPT	-	-	-	1	7.69	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		2	ホーチミン市自衛科学大学 HCMUS	-	-	-	-	-	-	-	-	1	9.09	1	3.03	1	3.03	1	3.03
		3	ハルビン工程大学 HEU	-	-	-	1	7.69	-	-	1	9.09	2	6.06	2	6.06	2	6.06	
		4	サイゴン国立工科大学 IPN	3	33.33	3	15.38	2	15.38	11名	2	18.18	7	21.21	7	21.21	7	21.21	
		5	バンドン工科大学 ITB	-	-	-	1	7.69	-	-	-	-	-	-	-	1	3.03	3	9.09
		6	キンツモンガク工科大学 KMITL	1	11.11	9名	1	7.69	13名	1	7.69	1	9.09	3	9.09	3	9.09	3	9.09
		7	オクタブマヤ大学 OU	-	-	-	1	7.69	-	-	1	9.09	1	3.03	2	6.06	2	6.06	
		8	淡江大学 TKU	2	22.22	-	1	7.69	-	-	1	9.09	1	3.03	4	12.12	4	12.12	
		9	ブレームン大学 UB	3	33.33	-	2	15.38	-	-	1	9.09	3	9.09	2	6.06	2	6.06	
		10	電子科技大学 UESTC	-	-	-	3	23.08	9校	2	15.38	3	27.27	9	27.27	9	27.27	9	27.27
		11	サイロンゴン大学 UOW	-	-	-	-	-	-	-	-	1	9.09	1	3.03	1	3.03	1	3.03
b 所属(学部・大学院)		1	Undergraduate 学部	3	33.33	-	7	53.85	-	7	63.64	7	51.52	17	51.52	17	51.52	-	
		2	Graduate 大学院	6	66.67	-	6	46.15	-	6	46.15	4	36.36	16	48.48	16	48.48		

資料2 授業評価の集計結果(設問1から4)

設問	質問	回答	項目	2016年度前期			2016年度後期			2017年度前期			集計			
				人数	割合	平均	人数	割合	平均	人数	割合	平均	人数	割合	平均	
1 この授業にどれくらい出席しましたか。		1	ほとんど出席	0	0.00	4.67	0	0.00	1	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		2	たまに出席	0	0.00	4.67	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		3	半分出席	0	0.00	4.67	3	23.08	3	23.08	3	27.27	3	27.27	9	27.27
		4	ほとんど出席	3	33.33	4.67	6	66.67	10	76.92	8	72.73	24	72.73	24	72.73
		5	すべて出席	6	66.67	4.67	6	66.67	5	38.46	5	45.45	11	33.33	11	33.33
2 この授業の予習・復習レポート等にあてられた時間は、1週間あたり平均してどの程度でしたか。		1	なし	0	0.00	3.89	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		2	30分未満	0	0.00	3.89	1	7.69	1	7.69	1	9.09	2	6.06	2	6.06
		3	30分～1時間程度	3	33.33	3.89	1	11.11	4	30.77	2	18.18	6	18.18	6	18.18
		4	1時間～2時間程度	4	44.44	3.89	7	53.85	7	53.85	3	27.27	14	42.42	14	42.42
		5	2時間以上	2	22.22	3.89	4	30.77	4	30.77	5	45.45	11	33.33	11	33.33
3 授業中不明だった点を質問や自分で調べることにより補いましたか。		1	そう思わない	0	0.00	3.22	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		2	あまりそう思わない	1	11.11	3.22	1	7.69	1	7.69	1	9.09	2	6.06	2	6.06
		3	どちらとも言えない	5	55.56	3.22	3	23.08	3	23.08	2	18.18	10	30.30	10	30.30
		4	ややそう思う	3	33.33	3.22	6	46.15	6	46.15	7	63.64	16	48.48	16	48.48
		5	そう思う	0	0.00	3.22	2	15.38	2	15.38	2	18.18	4	12.12	4	12.12
4 授業の目的に応じた知識、考える力、技能等を身に付けることができたと思いますか。		1	できなかつた	0	0.00	4.44	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		2	あまりできなかつた	0	0.00	4.44	1	7.69	1	7.69	1	9.09	2	6.06	2	6.06
		3	半分程度できた	0	0.00	4.44	2	15.38	3	23.08	0	0.00	2	6.06	2	6.06
		4	ややよくできた	5	55.56	4.44	4	30.77	4	30.77	5	45.45	14	42.42	14	42.42
		5	できた	4	44.44	4.44	5	38.46	5	38.46	5	45.45	14	42.42	14	42.42

資料3 授業評価の集計結果(設問5から12)

設問	質問	回答	項目	2016年度前期				2016年度後期				2017年度前期				集計平均				
				人数	割合	点	集計グラフ	人数	割合	点	集計グラフ	人数	割合	点	集計グラフ	人数	割合	点	集計平均	
5	各回の授業はよく準備・整理されていますか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	1	4.89	0	0.00	1	4.77	0	0.00	1	4.55	0	0.00	0	0.00	
		3	どちらとも言えない	0	0.00	1	11.11	0	0.00	3	23.08	1	9.09	3	27.27	1	3.03	1	3.03	
		4	ややそう思う	8	88.89	3	76.92	3	76.92	7	63.64	3	27.27	7	21.21	7	21.21	7	21.21	
		5	そう思う	0	0.00	5	88.89	5	84.62	5	75.76	5	63.64	5	75.76	5	75.76	5	75.76	
6	説明は理解しやすいですか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		3	どちらとも言えない	0	0.00	1	4.89	0	0.00	3	4.85	0	0.00	3	4.55	0	0.00	0	0.00	
		4	ややそう思う	1	11.11	2	15.38	2	15.38	5	45.45	5	45.45	8	24.24	8	24.24	8	24.24	
		5	そう思う	8	88.89	5	77.78	5	84.62	5	75.76	6	54.55	6	54.55	25	75.76	25	75.76	
7	声はよく聞き取れましたか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		3	どちらとも言えない	0	0.00	1	4.78	0	0.00	4.92	1	9.09	1	3.03	1	3.03	1	3.03	1	3.03
		4	ややそう思う	2	22.22	1	7.69	1	7.69	3	27.27	3	27.27	6	18.18	6	18.18	6	18.18	
		5	そう思う	7	77.78	5	77.78	5	92.31	5	63.64	7	63.64	7	63.64	26	78.79	26	78.79	
8	黒板やスライドの文字は読みやすかったですか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		3	どちらとも言えない	1	11.11	1	4.44	0	0.00	4.69	0	0.00	0	0.00	1	3.03	1	3.03	1	3.03
		4	ややそう思う	3	33.33	4	30.77	4	30.77	2	18.18	2	18.18	3	27.27	3	27.27	9	27.27	
		5	そう思う	5	55.56	5	55.56	5	69.23	5	81.82	9	81.82	9	81.82	23	69.70	23	69.70	
9	教材(教科書、プリント、小テスト、ウェブなど)は適切でしたか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		3	どちらとも言えない	0	0.00	1	4.67	0	0.00	4.77	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		4	ややそう思う	3	33.33	3	33.33	3	23.08	3	27.27	3	27.27	3	27.27	9	27.27	9	27.27	
		5	そう思う	6	66.67	5	66.67	5	76.92	5	72.73	8	72.73	8	72.73	24	72.73	24	72.73	
10	授業を進める速度はどうでしたか。(優秀ではありません)	1	遅かった	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	やや遅かった	0	0.00	0	0.00	0	0.00	4.62	0	0.00	18.18	4.45	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		3	ちょうどよかった	0	0.00	1	7.69	1	7.69	3	23.08	2	18.18	3	27.27	8	24.24	8	24.24	
		4	やや速かった	3	33.33	6	66.67	9	69.23	5	63.64	7	63.64	7	63.64	22	66.67	22	66.67	
		5	速かった	6	66.67	5	66.67	5	69.23	5	72.73	8	72.73	8	72.73	24	72.73	24	72.73	
11	シラバスに沿って授業が行われましたか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	4.85	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		3	どちらとも言えない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	4.85	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		4	ややそう思う	1	11.11	2	15.38	2	15.38	3	27.27	3	27.27	6	18.18	6	18.18	6	18.18	
		5	そう思う	8	88.89	5	84.62	5	84.62	5	72.73	8	72.73	8	72.73	27	81.82	27	81.82	
12	総合的にみて、この授業はよかったですか。	1	そう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	
		2	あまりそう思わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	4.64	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		3	どちらとも言えない	0	0.00	0	0.00	0	0.00	4.69	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
		4	ややそう思う	2	22.22	4	30.77	4	30.77	4	36.36	4	36.36	10	30.30	10	30.30	10	30.30	
		5	そう思う	7	77.78	9	69.23	9	69.23	9	63.64	7	63.64	23	69.70	23	69.70	23	69.70	

# 外国人留学生の学生生活保険の加入と利用

## -電気通信大学の正規留学生について-

濱野哲子\*

日本国内に保護者相当の保証人がいない外国人留学生に想定していなかったトラブルが起こると、当然のことながら大学に助けを求めてくる。電気通信大学では、そのトラブルが大小にかかわらず金銭的な負担が伴うトラブルの場合、留学生担当の教職員が責任を持って対処することが難しい。2008年度から、国内に経済的な支援をする保証人がいない留学生には、入学手続き時に学生生活保険の加入を行うよう指導を行ってきている。本稿では、本学の学域（学部）および大学院課程の外国人留学生に対する学生生活保険の加入指導の経過について報告する。加入者は2009年度には13%程度であったが、2017年度には70%以上となっている。国内の保証人がいる留学生と合わせると、現在、約90%となっている。

キーワード：留学生指導、学生生活保険、留学生危機管理、学生教育研究災害傷害保険

### 1. はじめに

本稿では、国立大学法人電気通信大学（以下、電通大）の外国人留学生（以下、留学生）に対する学生生活保険の加入指導および加入による効果について報告する。2008年度に留学生に対する危機管理方針が設定されてから、留学生の学生生活保険の加入指導や保険金請求の手續において試行錯誤があった。そこで、これまでの経緯をまとめる。学部や大学院で学位取得を目的として2年以上の正規課程に在籍する留学生が加入する学生生活保険の内容やその加入指導方法と保険金請求状況などについて報告する。

### 2. 留学生への保険加入指導の背景

電通大は情報理工学域と大学院情報理工学域学専攻の1学域（学部）・1大学院[1]からなる理工系の大学である。2017年5月現在、外国人留学生（在留資格「留学」を所持する学生、以下「留学生」）は33カ国からの275人が在籍する。在籍留学生は次の種別に分類される。

1) 正規生：学位取得を目的とする学域あるいは大学院の正規課程に在籍する学生

- 2) JUSST生：大学間協定による交換留学プログラム生
- 3) 予備教育生：国費留学生して大学院への進学が決定している研究生
- 4) 研究生：学期単位で在籍し、大学院受験の準備をしている学生
- 5) 科目等履修生：講義を受講することを主な目的とする学生
- 6) 短期特別プログラム生：滞在時期が学期に関わらず一ヶ月から一年未満で在籍する交換プログラム生
- 7) 短期研究生：研究活動を目的に、滞在時期が学期に関わらず一ヶ月から一年程度の在籍する研究生

本稿では、1) の学生に関わる状況についてのみ述べる。

電通大では長年、留学生に国民健康保険への加入状況を、外国人登録（現在は住民登録）の登録状況とともに確認してきた。2012年7月に入管法の改正がなされた後は、市役所での住民登録と国民健康保険が一度に手続きされるようになり、それらの加入状況を学生課留学生係が確認するようになっている。

一方、従来から入学手続き時に、留学生も含め

た全学生に日本国際教育支援団体（JEES）の学生教育研究傷害災害保険（学研災）及び学研災付帯賠償責任保険（付帯賠償）、あるいは大学生協の学生総合共済・保険について案内している。しかし、個人加入の総合保険の加入を指導し始めるまで、留学生の加入あるいは利用（保険金請求）状況を把握することはなかった。かつ、指導も行われていなかった。また、2008年度まで文部科学省の予算で運営されていた「留学生の医療費補助制度」についても、任意参加の新入留学生向けガイダンスで簡単に説明がなされているだけであった。唯一、JUSST生のみが、筆者が電通大に着任した2007年時に、大学生協の学生総合共済・保険を利用していた。

2008年夏に留学生が命に関わる事故にあった。この学生は幸い大学生協の共済・保険に加入していたため、個人の治療費等の支払い負担がなく、十分な治療を受けることができた。これをきっかけに、電通大では「外国人留学生の危機管理方針」を定めた。その方針により、外国人留学生の疾病や傷害あるいは賠償責任などのトラブル発生時に、経済的な問題で学業が中断されることなどが起こらないよう、留学生は大学が指定する学生生活保険に加入するか、国内に家族あるいは家族と同等の保証人がいるならばその連絡先情報を提出するように、筆者ら留学生担当の教職員は指導をしている。

### 3. 学生生活保険について

本章では、電通大で留学生に加入を指定している「学生生活保険」について簡単に説明する。

#### 3.1. 生活保険種類の選択

本学大学生が加入できる保険は、次の四種類の保険内容からなっている。（表1参照）

##### (1) 生命・医療保険

疾病や事故による死亡・後遺障害に対する補償。疾病や傷害での入院・手術・通院などの医療費に対する補償。

##### (2) 賠償責任保険

大学での正課活動・課外活動をはじめ、日常生活での個人賠償責任請求に対する補償。

##### (3) 救援者保険

被保険者の事故時などにおける救援者の交通費や宿泊費の補助。

##### (4) 火災保険

借家人賠償と被保険者の生活用動産の盗難に対する補償。

上述の通り、JUSST生には従来から大学生協学生総合共済を基本とした「生協共済・保険セット」への加入を義務づけてきた。

同様に、正規生にも「生協共済・保険セット」の加入を勧めることを考えたが、もう一つ、日本

表1 大学生協学生総合共済と学研災系保険と一般的な4種類の保険との対応関係

	補償内容	大学生協学生総合共済 (生協共済・保険セット)	JEESの保険(学研災セット)
(1) 生命・医療	死亡・後遺障害、入院や通院の医療費に対する補償	生命共済	学生教育研究災害傷害保険(学研災) + 学研災付帯学生生活総合保険(付帯学総)* ----- (住居の種類によっては、大学生協の火災共済の加入で対応)
(2) 賠償責任	個人賠償責任請求に対する補償	学生賠償保険	
(3) 救援者費用	保険に加入した学生を救援・支援するときの交通費や宿泊費の補助	(海外旅行保険の特約で対応)	
(4) 火災・住宅保険	賃貸住宅でのトラブル時に補償	火災共済	

\*2017年10月より、「留学生向け付帯学生生活総合保険(インバウンド付帯学総)」に変更している。

国際教育支援団体（以下、JEES）の学生教育研究傷害災害保険（以下、学研災）と学研災付帯学生生活総合保険（以下、付帯学総）の組合せからなる「学研災セット」が候補にあがった。なぜならば、本学学生課では入学手続き時に学研災を基本とする保険の加入を勧めてきたからである。そこで2008年度から2011年度までは留学生に「生協共済・保険セット」か「学研災セット」のどちらかを選択して加入するように指示した。

### 3.2. 学研災付帯学生生活総合保険（付帯学総）

実際に加入手続や保険金請求の手続を行っていくうちに、大学生協のセットに比べて、学研災セットに加入することの方がメリットがあることがわかってきた。

まず、各課程の最短在籍期間（学部・学域4年間、博士前期課程2年間あるいは博士後期課程3年間）の保険料総額が割安である。このことについては、後節で述べるように留学生側からの強い要望があった。

次に、医療保険について、通院一回から補償対象となることである。電通大での付帯学総は、一般学生（日本人学生）のために用意されているので、保険内容や補償額の組合せからなるいくつかのタイプがある。留学生に加入を勧めるタイプは表1に示した、基本的となる四種類の保険（生命・医療保険、賠償責任保険、救援者費用、火災保険）の内容を含んだものとなっている。

前節の(1)の生命・医療保険は、一般にいう生命保険や入院保険あるいは傷害保険の学生版となる。付帯学総は死亡および後遺障害の保険金が低額である一方で、疾病や傷害の補償が厚く、疾病でも健康保険を利用しての自己負担額（つまり三割負担分）が一回の通院から全額補償される。手術や入院など医療費がかさむ場合には、国民健康保険の高額療養費制度を利用して支払った金額が補償される。一方で、保険金請求には付帯学総の適用条件がある。例えば、保険の対象となる治療期間が設けられていたり、歯科治療や精神疾患治療は対象外などの制約がある。これまでに留学生が保険を利用できなかったケースについてその例をいくつか後述するが、基本的に留学生の日常生活で起こりやすい疾病や傷害については補償されると考えてよいだろう。それに対して、大学生協の生命共済では疾病による通院は補償外

である。

(2)の賠償責任保険には、インターンシップを含む大学の正課活動と関わる賠償責任と日常生活での賠償責任が補償範囲に含まれている。また、日本語が不自由な留学生には非常に有用な示談交渉サービスもついている。

(3)の救援者保険は、留学生自身ではなく、留学生を受け入れている大学の関係者あるいは母国の家族が留学生の不慮の事故の際に利用するものである。留学生の命が関わるような際には、母国の保護者が経済的な負担を負わずに来日することができる。

(4)の火災保険については、付帯学総では借家人賠償責任保険金が最大300万円と補償が低いので、一般の不動産賃貸の借家人賠償責任保険としては不十分である場合が多い。ゆえに、学外の一般賃貸住居を借りる学生は、不動産会社指定の火災保険や大学生協の火災共済に加入している。また、大学の学生寮に住んでいる学生は各学生寮の指定の火災保険に加入をしている。そのため、現在在学中の留学生の多くは(4)を含まない付帯学総のタイプに加入している。

最後に、加入時から在籍している課程の最短修了予定年月までの一括契約であることも、加入者側からのみならず、加入指導をする教職員にとってもメリットがある。付帯学総への加入は、その「付帯」という言葉の通り、学研災の加入が基本となり、保険契約は最短修了予定年月までの月単位（学研災の加入は年単位）の契約となる。修了予定が変更になった場合も、学研災に加入しているならば、月単位で在学期間の再契約が可能である。また、早期修了や退学の場合も、月単位で解約が可能である。

加入申込みや予備請求方法も簡単である。申込みは、ゆうちょ銀行の振込用紙と一体となった申込用紙に記入してゆうちょ銀行で振込を行うだけである。保険金は、専用相談窓口で電話で連絡して請求するが、2016年度からはインターネット上でも予備請求ができるようになった。

ただし、学研災は大学で加入者の管理・確認ができるが、付帯学総は個人契約となり、学生各自が大学に加入したことを報告しないと、大学が加入状況を把握できない。その点は、加入者の連絡先を一括して大学宛にすることで対応ができた。

#### 4. 保険加入指導と加入状況の推移

本章では、2008年度から2017年度現在までの指導経過と加入者数の実績を示す。

##### 4.1. 2008年度～2009年度

2008年10月の時点で、在籍する正規生が290人いた。これらの留学生に「留学生の危機管理方針」に沿って、国民健康保険の加入状況の確認や学生生活保険の必要性を説明するために、2008年度内に計10回の説明会を実施した。大学院生や学部4年生など研究室での活動が中心となる私費留学生は、大学生活に問題が起こらない限り、留学生担当の教職員とほとんど接触がない。そのため、在学留学生全員への説明会実施の周知は難しく、10回の説明会で出席した留学生は159人だけであった。

参加したほとんどの私費留学生から「保険料が払えない。(在学中の今となっては)負担できない。」という声が上がった。また、保険制度が整備されていない国からの学生の中には「保険勧誘は詐欺だと思ふ。保険の加入はお金の無駄である。」と懐疑的な意見を述べる者もいた。

そこで、入学手続き時に、入学金や授業料の振込をすると同時に、学研災と付帯学窓に加入するように指導を行うこととした。2009年度から入学手続き会場に、留学生のみの追加手続き窓口を開設した。その窓口で学生生活保険の重要性を説明し、その場で留学生に加入書類の記入を行わせることとした。この2009年度の手続において留学生が保険に加入しない理由が、単に経済的な負担があることだけではなく、多くの留学生が自力で書類記入を行うことは難しいためであることがわかった。

入学手続で加入を促すとともに、入学直後の新入留学生オリエンテーションで、学生生活保険に加入する理由やその利用(保険金請求)方法について詳しく説明を行った。ここでは、数日間の入院や怪我による数日間の通院など具体的な例をあげて、保険未加入時にかかる医療費の自己負担額と保険加入による医療費支払いの軽減を示し、生活保険の加入のメリットを訴えた。

2009年4月入学の正規生(総数84人)の加入率は13%程度であり、効果的に加入指導が行き渡らなかったことがわかる。加入したのは文科省国費

生や政府派遣生など、経済的に余裕がある学生ばかりであった。ただし、この年は加入者に対して保険金の請求手続を行って、保険利用の事例がいくつか得られた。また、同年度内に保険未加入の学生に疾病や傷害事故が発生し、経済的に困難に陥ったケースも何件かあり、保険未加入の場合の事例も得られた。

##### 4.2. 2010年度～現在

2009年度に加入指導が効果的に行き渡らなかった反省から、留学生に保険の必要性を身近に感じさせることと教職員が保険に関わる各種手続をサポートすることの重要性を学んだ。そこで、2010年度以降の新入生へのガイダンスでは、保険加入の重要性を説明するために、これまでに保険加入したことが有益だった事例を紹介するようになった。

2010年度以降、保険加入を徹底するために、留学生には大学からの支援を得るための条件として、保険の加入を求めるようになった。入学手続き時に、在留管理に必要な個人情報の提出とともに、(A)日本国内に保証人がいないので、学生生活保険に加入して、緊急時は大学に対応を委任する、か(B)日本国内に保証人となる親戚や知り合いがおり、緊急時はその人が対応する(ただし、学研災と付帯賠償には加入)、について、そのいずれかを確認するようになった。保証人がいない(A)を選択する学生には学研災と付帯学窓の加入を求めた。その結果、2009年度4月入学生はに保険加入者が13%程度だったのが、2010年4月の正規新入留学生では付帯学窓の加入率が42%となり、近年で

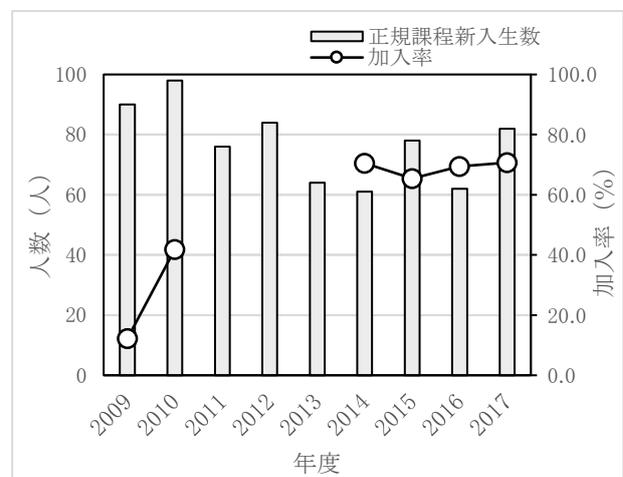


図1 4月入学の正規課程留学生における付帯学窓の加入率(2011～2013年度除く)

は70%前後の加入率を保っている。図1に2009年度から2017年度までの4月入学正規生の入学直後の付帯学総の加入率を示す。(ただし、2011年度～2013年度は全対象者に対する調査がなされていない。)

2017年4月入学では、正規生82人に対して、付帯学総の加入者が70%を超え、(B)の「国内に保証人がある学生」と合わせて90%以上となっている。今後もこの数値を維持していくためには、前章で示した「入学手続き時の保険加入指導と加入手続きや保険金請求手続きなどの補助」や「新入生オリエンテーションでの学生生活保険の説明」を実施していかなければならないだろう。

## 5. 付帯学総の利用状況と効果

本章では、付帯学総の利用(保険金請求)状況について述べる。まず、保険の利用による一番のメリットは学生への経済的な補償である。例えば、急な発熱で平日に国民健康保険証を提示して医院で治療を受けると、一回の通院治療と処方医薬品の購入で、3割自己負担で2,000～3,000円かかってしまう。付帯学総はこの自己負担分の全額を補償する。(ただし、通院の交通費については補償しない。)

重い疾病あるいは傷害による高額な入院・手術の場合、国民健康保険の高額療養費制度が適用される。年収が100万円以下の単身の留学生の場合、住民税非課税世帯の区分(オ)にあたり、その制度における医療費の自己負担額は一ヶ月あたり最大で35,400円となる。付帯学総は、高額療養制度適用後のこの医療費を補償する。さらに、入院の場合は入院日と退院日の被保険者(留学生)の交通費が請求できる。そして、手術の付き添いや入院中の支援で大学の関係者が付き添った場合、病院までの往復交通費が救援者保険で補償される。被保険者(留学生)が母国など遠方にいる家族の付き添いを必要とする場合には、家族の渡航・交通費用や滞在費用についても救援者保険が補償する(ただし、利用制約や保険金の上限はある)。

これまでに学生生活保険に未加入の学生が急な体調不良あるいは怪我で入院し、留学生本人が入院保証金の支払いができずに困ることがあった。その際には、友人や研究指導教員からお金を

借りるか、クレジットカードのローンを利用して入院をした。

図2に2010年度から2017年度(2017年度は4月から8月まで)の本学留学生の付帯学総の利用数を示す。このグラフでの数値は筆者が保険申請を補助した請求件数であり、留学生の中には個人で請求手続きをした者もいるため、実際の利用件数はこれよりも多いと考えられる。このグラフからもわかるように、2015年以降、毎年度50件以上の利用数がある。2011年以降、本学の正規生数が減っているにもかかわらず(図1参照のこと)、利用数が増加している傾向から、留学生1人あたりの保険請求機会が増えていることがわかる。

保険請求の理由で一番多いのは、疾病による通院と処方箋薬品の購入にかかった医療費である。それは全体の約80%を占めている。毎年、季節の変わり目に風邪や鼻炎、皮膚炎を発症したり、論文や発表等の締め切り前後に体調を崩したり、ストレスが原因のアレルギー反応(皮膚炎や鼻炎)を起こしたりしているのが目立つ。また、大学院留学生の疾病による請求は学域・学部留学生の同様の請求よりも件数が多い。

保険請求の残りの約20%は、怪我、急病による手術と入院がほとんどを占めている。怪我の発生は年に1～2件、多くても3件ほどであり、スポーツ中の事故か自転車事故である。留学生の入院や手術は、2010年度から2017年度前学期(2017年9月)までの7.5年間で平均して年に1～2件発生している。

賠償責任保険の利用は、これまでに2件ほどしかない。しかし、本学の留学生は自転車通学をしている学生が多いため、自転車事故での賠償責任

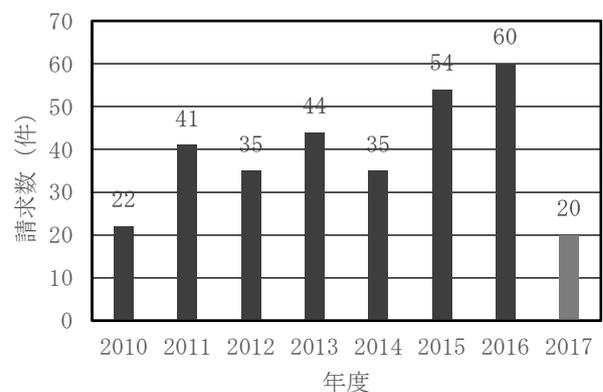


図2 付帯学総の申請件数

に備えて、保険の加入が重要であると考えている。

留学生への学生生活保険の導入にあたって、留学生担当の教職員が加入手続きや保険請求の支援を行った結果、予想もしなかったよい効果も得られた。大学院生は研究室での活動で日々多忙のため、留学生向けの行事や国際教育センター教職員が開講する授業に参加する機会が少ない。そして、大学院生の多くが国際教育センターや学生課留学生係に立ち寄る理由もないため、教職員がそれらの学生、特に大学院から入学した留学生が入学後に大学院生活に上手く適応しているのか知ることが難しかった。

学生保険の導入後は、入学手続きや入学直後のオリエンテーションの時のみならず、通院などによる保険請求申請についての相談で一部の大学院生が直接国際教育センターに足を運ぶようになった。保険申請を通して、大学院留学生が留学生担当教職員とコミュニケーションを取る機会が増えることで、大学生活や日常生活で問題が出て来そうな学生や、その問題を早めに把握できるようになった。また、学生からも「あまり知らない教職員に連絡を取るのとはとても躊躇するが、顔なじみの教職員だと連絡しやすい・相談しやすい。」との感想をきいている。

## 6. 今後の課題および付帯学総への要望

最後に、学研災および付帯学総を利用して来た中であがってきた本学での問題点や今後の課題、また、付帯学総の補償内容に関する（JEESあるいは引受保険会社への）要望をいくつか挙げる。

学研災および付帯学総の利点は、加入時に卒業・修了予定年月まで一括の契約をすることである。よって、一度加入を確認すれば、在学中に再度保険の加入状況を確認する必要はない。課程途中で休学や退学などをするようになった場合、付帯学総はその時点で月単位で解約することができる[2]。そして、復学をした時に、再度新規の加入手続きを行うこととなる。主に大学院生で課程の最短修了期間で修了できない学生がいるが、在学期間を延長する場合、予定される修了時期までの新規契約を勧めている。ただし、課程期間中に保険金の請求をした経験がある学生は積極的に再契約を希望するが、実際の再契約者数は50%にも満たない。その理由は、保険の再加入が在学中の

出費となるためである。もう一つの理由は、筆者側の問題で、修了可否についての情報収集が遅れることで指導のタイミングを逃してしまうこともあげられる。課程修了が延期になる留学生への再加入指導についてはその方法とプロセスの見直しが必要である。

次に、付帯学総への要望としては、その医療保険で適用されない疾病や症状についても補償して欲しいことであげられる。例えば、歯科治療や精神疾患は補償外となる。国民健康保険が適用されるすべての疾病や傷害が付帯学総の補償の対象となっていないため、一部の留学生から「その利用条件が理解しにくい。」や「加入する価値がやはり低い（加入するメリットがない）」という意見が出てくる。留学生担当の教職員からみると、精神的に不安定な留学生は日本で単身で治療をするよりも母国に一時帰国をし、母国にいる保護者の元で治療を受ける方が安心である。次のことについても付帯学総で補償されると、留学生も教職員もより安心できるであろう。

- ・傷害事故による抜歯費用

- ・精神疾患の留学生の帰国に伴う救援者費用

前述の通り、電通大では傷害による保険金請求の事例数は少ないが、スポーツ中の事故では接触により歯を折ることも十分想定できる。付帯学総の説明時に、留学生より「万が一、スポーツ中の事故で歯を折ったりして、歯を抜かなくてはならない場合でも、これ（付帯学総）は補償してくれるのか？」という質問もあり、傷害の場合の歯科治療も付帯学総で補償されると学生も安心だと考えるようだ。

精神疾患に関わる事例は近年電通大でも増えてきている。精神疾患の治療については、国民健康保険でも精神科専門療法という項目立てで請求計算が別立てになっているため、精神科で受ける治療は付帯学総の補償対象外でも致し方ないと思われる。しかし、心が不安定な学生に母国で治療をすることを促すためにも、あるいは、保護者が日本で留学生に付き添ってもらうためにも、日本への渡航費の一部でも救援者保険で補償されるようになるとありがたい。

## 7. むすび

本稿では、電通大における学研災付帯学生生活

総合保険の活用について紹介した。保険に加入している留学生は病気や怪我をした時に、経済的な心配をせずに治療をして直し、勉学や研究に打ち込むことができる。

留学生に学生生活保険を有益に利用してもらうためには、留学生担当の教職員の指導と支援が欠かせない。支援には関係者の時間や手間がかかると思われがちだが、実際は留学生と直接関わる時間が増えることにより、留学生に関わるトラブルへの早めの対処にもつながる。

2017年4月からJEESが「留学生向け学研災付帯学生生活総合保険（インバウンド付帯学総）」の運用を始めたことを機に、電通大では2017年10月より、JUSST生や短期滞在学生にも、一律「学研災セット（学研災とインバウンド付帯学総）」に加入することを指導をしていくこととなった。いろいろな種別の留学生が学研災セットに加入することでさらに保険請求の頻度も上がっていくと予想される。それに伴い、学生が保険加入や保険金請求の手続を効率的にできるよう留学生担当教職員の協力体制の整備が求められる。

## 注

- [1] 2017年9月現在、情報理工学域および大学院情報理工学研究科の他に、2015年度以前の旧組織である情報理工学部、(旧) 大学院情報理工学研究科、大学院情報システム学研究科の1学科2研究科の学生も在籍している。
- [2] 学研災の解約手続は年単位の契約のため異なり、本学の場合、学生課経由で手続を行う。

## 引用文献

- 国立大学法人電気通信大学 概要2017-2018、2017年6月発行、<http://www.uec.ac.jp/about/profile/pamph/pdf/gaiyou2017-2018.pdf>
- 学生教育災害傷害保険（学研災）、<http://www.jees.or.jp/gakkensai/>
- 学研災付帯学生賠償責任保険（付帯学賠）、<http://www.jees.or.jp/gakkensai/opt-baisho.htm>
- 学研災付帯学生生活総合封建（付帯学総）、<http://www.jees.or.jp/gakkensai/opt->

[gakuso.htm](#)

留学生向け学研災付帯学生生活総合保険（インバウンド付帯学総）、[http://www.jees.or.jp/gakkensai/pdf/futaigakuso/inbound\\_outline.pdf](http://www.jees.or.jp/gakkensai/pdf/futaigakuso/inbound_outline.pdf)

大学生協学生共済、<http://kyosai.univcoop.or.jp/>

厚生労働省ホームページ、「高額療養費制度を利用される皆様へ」、[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryoku/iryohoken/juuyou/kougakuiryou/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryoku/iryohoken/juuyou/kougakuiryou/index.html)

国大協サービス(2012)「リスクマネジメントの現場」『国立大学リスクマネジメント情報』2013年3月号、6

<http://www.janu->

[s.co.jp/mail\\_magazine\\_html\\_data/130330.html](http://www.janu-s.co.jp/mail_magazine_html_data/130330.html)

---

\*電気通信大学国際教育センター

# 「マルチモダリティ」という視点から考える日本語授業

## —理系大学院生を対象としたプレゼンテーション活動を事例に—

本郷智子\*

本稿は、限られた日本語リソースを最大限に生かすコミュニケーション教育を目指し「マルチモダリティ」の視点を取り入れた日本語授業の実践を報告する。ここでのマルチモダリティとは、人がコミュニケーションを行う際、言語のみならず、身体動作や視線などの非言語行動、図や絵などの視覚的情報、道具、空間などのモード（表現様式）を包括的に活用し、意味を作り出す相互作用を指す。事例として、理系大学院生を対象に実施した「図と絵ですすめるプレゼンテーション活動」を取り上げ、マルチモダリティの点から分析する。

**キーワード：**マルチモダリティ モード 相互作用 リソース プロセス

### 1. はじめに

昨今、国際社会におけるグローバル化が進む中、理系大学は、研究領域における新たな知の創出を求めて、国際的に協働したりあるいは競争をしたりしながら、研究者が必要に応じて場を移動するコミュニティに変容している。各大学で短期滞在の外国人研究者・留学生が増え、これまで以上に、多様な考え方、ことば、文化、価値観を持つ人々との関わりが生まれ、相手、トピック、場面等によって変わる、多様なコミュニケーションの在り方が生まれてきている。この傾向は、今後、情報テクノロジーの活用等から起こる社会構造の変化により、さらに加速されることが予想される。

このような環境において、留学生が日本で実のある研究生生活を行うには、時間をかけて日本語を精練されたレベルまで学ぶことを目指す以上に、日本で出会う多様な背景を持つ研究者や学生と、場に合わせて、相互行為を行っていく動的なコミュニケーションのあり方（本郷 2017）が求められるようになってきている。この現状を踏まえると、日本語教育においても、日本語学習を初級から上級までの連続的な学習期間で捉えたり、話す・聞く・読む・書くの4技能をバランス良く獲得していくことを目標としたりすることは現実的ではなく、限定的ではあっても学習者個々の日本語リソースを最大限に生かすコミュニケーション力

の養成を考えていくほうが有用であると考えられる。

本稿ではそのひとつの試みとして、理系コミュニティに所属する参加者がコミュニケーションを行う際、多様なリソースを活用することに留意した「マルチモダリティ」という視点を取り入れた日本語授業を報告する。ここでのマルチモダリティとは、言語のみならず、身体動作や視線などの非言語行動、図、絵、写真などの視覚的情報、空間、道具などのモード（表現様式）を包括的に生かして、意味を作り出す相互作用を指す（Kress 2010、Jewitt, Bezemer and O’Halloran 2016）。対象とする学習者は理系分野を専門とする大学院生、研究生であり、1）通常英語で論文執筆や学会発表を行っており、研究活動を遂行する上で日本語の読み書き能力のニーズは低い、研究内容を日本語でも説明したいというモチベーションが高い、そして、2）専門内容について熟知しており、説明において、どのような図・絵が適切かという判断ができる（上原 2016：10）、という特徴をもっている。日本語リソースは、限られたものであっても、他のリソースとともに最大限に生かすことで、専門のトピックについて説明することを目指したプレゼンテーション活動を試みた。

本稿では、その中のプレゼンテーションの準備段階に焦点を当て、マルチモダリティの点から分析する。

## 2. 先行研究：マルチモダリティとは

マルチモダリティは、1990年代からコミュニケーションを包括的に分析するひとつの視点として、言語学、教育学、社会学、情報メディア工学、ロボット工学等、さまざまな分野で研究が行われている。Jewitt, Bezemer and O' Halloran (2016) は、マルチモダリティ研究は、マルチ=多くの、モダリティ=表現様式、という語義を基本とし、分野によってそれぞれ異なる研究志向があるものの、いずれの場合も、多様なモードを生かした意味形成のプロセスに関心があると述べている。本稿ではその中の、「社会記号論」の分野で研究されてきたマルチモダリティを考察の枠組みとする。

Kress は、社会記号論の立場から「現実の社会でやりとりされる社会的記号は、元来多様なモード（表現様式）の組み合わせで成り立っている」（Kress et al. 2005:2、筆者翻訳）とし、人々が相互行為を行う際、多様かつ多層なモードが包括的に関わり意味を作り出していると論じている。そして、「社会記号論では、記号が使用されるのではなく、記号作成者が意味を適切な形と結合させることで記号が作られるのである。その形は、記号作成者の関心事により選択、形成される。この表現過程で、記号作成者は、常に変容する文化的リソースを用い、社会世界に対処すべく概念や「知識」を再構築するのである」（Kress 2010: 62、筆者翻訳）と記号と社会の関係を定義している。

そのうえで、マルチモダリティに関して、「人はリソースを活用して、自分の周りの人間に理解される記号を使うが、リソースがない場合は、自分が伝えたい意味を強く連想させる記号を作る。このような役割で、ジェスチャー、描画、指差などが用いられる」と多様なモードの有用性に言及している。（Kress 2010:65、筆者翻訳）

そして、具体的な事例として、理科授業を対象に、言語だけではなく、視覚的イメージ、材料、化学薬品、実験装置、模型など、多様なリソースが学習者の理解を促進しているプロセスを分析し、マルチモーダルな視点を教育に活用する有用性を示した（Kress 2001）。そこでは、コミュニケーションにおいて、人々が関わりながら意味を形成していくプロセスを、言語だけではなく、多様なリソースが活用され、常に変容していく動的なも

の、と捉えている。

このマルチモダリティの概念は、グローバル化がすすむ多言語・多文化社会において発展してきた言語実践の教育観とも通じるところがある。例えば、Pennycook & Otsuji (2015) が提唱した「メトロリンガリズム」では、言語・非言語的リソースの集合体を利用して参加者がマルチモーダルに会話をするそれぞれの「場」を言語実践として捉えている。また、村田 (2009) では、インド人エンジニアと日本企業の日本人エンジニアとのコミュニケーションにおいて、英語、日本語など言語のみならず、絵、図、数字を組み合わせ、マルチモーダルに相互行為を行うことの有用性に言及し、それを「ブリコラージュ」（多様なリソースの織り成し）と呼んでいる。

さらに、「トランスリンガル・プラクティス」（Canagarajah 2013）では、人々がいくつものコミュニティを行き来する時代の新しい言語教育のパラダイムを考えるカギ概念のひとつとして、マルチモダリティを提示している。コミュニケーションが言語のみならず、図、記号、イメージ、場、空間、身体動作、リズムなど多様かつ多層的なリソースを織り交ぜながら成り立つことから言語教育を考える重要性を指摘している。佐藤・佐伯 (2017) は、トランスリンガル・プラクティスについて、「ある一つのコミュニティに所属できるようにすることを目標にするのではなく、いくつかのコミュニティの間を行き来できるようにすることを目標としている。そして、必要に応じて新しいコミュニティをつくったり、別のコミュニティへ移っていったりできるようにする」と述べている。

## 3. マルチモダリティの視点を取り入れた日本語授業

### 【活動概要】

マルチモダリティの視点を取り入れた日本語教育の授業実践として、農学系大学院生および研究生を対象に東京農工大学で実施したプレゼンテーション活動を取り上げる（上原他 2016）。科学関連のトピックについて、あるメカニズムを説明するプレゼンテーション活動を行う前段階として、原稿を書く代わりに図・絵を描いて内容・論理構成を組み立て、プレゼンテーションの準備

を行った。

対象者は農学系大学院生7名(国籍:タイ2人・アフガニスタン・イラン・インドネシア・ケニア・ベトナム各1人、専門:水利学2人・植物科学1人・獣医4人)である。専門分野のあるトピックについて「〇〇のメカニズム(科学現象の仕組み)」を説明する一連の活動を、次の手順で実施した。

1. トピックを決定する。
2. ペアで図・絵を描きながら当該のメカニズムを説明し合い、プレゼンテーションの内容および構成を作り上げる。(ペアを替えて繰り返す)
3. スライドを用いてプレゼンテーション形式の口頭練習を行う。
4. プレゼンテーションを実施する。
5. 振り返りの話し合いを行う。

学習者が選んだトピックは、「棚田にスムーズに水を流すメカニズム」(水利学)、「植物が隣の植物の成長を悪くするメカニズム」(植物科学)、「猫が腎臓病になるメカニズム」(獣医)などであった。

本稿では、上記活動の第2段階、学習者が自分のプレゼンテーションを準備するプロセスにおいて、ペアで図・絵を描きながら説明し合い、内容や構成を作り上げる活動をマルチモダリティの観点から分析する。

### 【分析項目】

活動の分析においては、マルチモード(多様な表現様式)として以下の項目に着目する。それらは個別に機能するのではなく、それぞれのモード間の相互作用により、コミュニケーションが行われると考える。つまり、「複数のモードが相互に関わりながら、それらによって、コミュニケーションが行われる」と捉える。

1. 言語: アクセス可能な口頭言語および記述言語。学習者は最終的には日本語でプレゼンテーションを行うことを目的としているが、活動のプロセスでは、日本語、英語、学習者の母語など複数の言語を活用している。
2. 非言語行動: 視線、ジェスチャー、および、身体動作
3. 図・絵などの視覚的情報: 学習者が修正を加え続ける手描きの図や絵
4. 空間: コミュニケーションが行われる学びの

空間。本活動では、ローテーション形式でペア活動が行われる空間を指す。

5. 道具: 学習者が活動を行う上でアクセス可能な道具。プロジェクター、コンピュータ、スマートフォン(辞書、録音機能)、ポインターなど。

分析においては、マルチモダリティがそれぞれのモードの相互作用に重きを置いた概念であることから、項目別に分析するのではなく、全てのモードを包括的に観察する手法を取った。

あらゆるモードが活用されている特徴的な事象として、以下3つの事例を取り上げる。

### 【事例1】ペアワークのローテーションが生み出す空間

プレゼンテーションの準備段階では、発表の内容および構成を作る目的で、ペアワークによるローテーション活動を行った。それぞれのペアワークでは、プレゼンテーションで伝えたい内容を説明しながら手描きの図・絵を修正することを繰り返し、それによって説明内容も自主的に修正されていくプロセスが見られた。

通常、プレゼンテーションを準備する段階では、学習者がスクリプトを書き、それを教師が推敲し、修正していく作業が行われることが多いが、本活動では、スクリプトを一切書かず、図や絵を描くことで内容と構成を練り上げていった。このペアワークのローテーションが行われる空間を示すと図1のようになる。学習者Aが異なるクラスメート、B、C、D、Eと説明し合う活動を続けていくことで、図や絵がよりわかりやすく修正されていく流れをモデル化している。クラスメートは、全員農学系の専門分野に所属しているが、専門領域は近いものもあれば、ほぼ関係がないものもいた。やりとりに関して、日本語を使用するよう特に指示はしなかった。

図と絵などを活用して、説明内容がペアワークの相手とのやりとりを通して構成されていくプロセスでは、相手が代わるたびに、相手との共有情報、または非共有情報に合わせて、異なるリソースが用いられ、内容もまた新たに修正されていた。

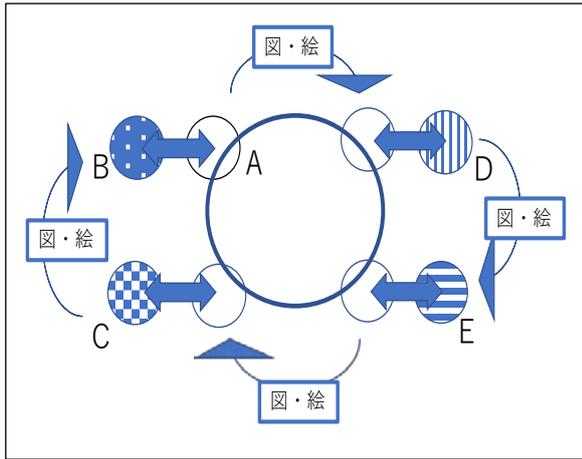


図1 ペアワークが行われる空間

専門が近い学習者同士のやりとりでは、説明の仕方や専門の語彙を教え合う様子が観察された。専門の知識を共有している場合、図・絵を見るだけで内容が理解できるため、ペアでの練習は、相手に内容を伝えるためではなく、説明をわかりやすくするためのステップとして用いられていた。例えば、専門が水利学同士の学生のペアワークでは、水路の絵を描きながら学生が「水の深さが深くなる」と言うと、聞き手である学生が「水位があがる」と言い、より端的な言い方で言い換えていた。

専門が違う学習者同士のやりとりでは、説明しても相手に伝わらない場合、言い換えたり説明を加えたりしていた。この場合には、ペアワークが、わかりやすい論理構成を構築するステップとなっていたと考えられる。例えば、水利学専攻の学生が「畑に水を流します」と言った場合、獣医学専攻の学生がわからない表情をすると、説明者は「川から畑は遠いです。でも畑に流します」と手描きで水路を示し付加情報を加えながら説明をしていた。

【事例2】図や絵の修正プロセス

図2は、学習者がペアワークのプロセスを通して、どのように図や絵を修正していったかの具体例を示している。対象学生はアレロパシー（植物の持つ化学物質が他の植物に与える影響）を研究している。最初の図は、キーワードと絵の簡単なものだけで論理構成が不明瞭なものだった。ペアワークが進み、異なるクラスメートとやりとりを行うことで、鍵概念のアレロパシーがわかる図に

なっていく。具体的には、サフランの隣にレタスがあった場合、サフランは花からガスのアレロケミカル、根から液体のアレロケミカルを出す。それがレタスにかかるるとレタスは成長せず、枯れることがあることをわかりやすく示す図になっていく。手描きの図や絵は固定された図や写真とは異なり、やりとりを通して説明の内容や構成を変えられる。話の流れに合わせてその場ですぐに修正できるメリットがある。そのため、説明の修正を図・絵の修正に、また反対に、図・絵の修正を説明に適宜反映させていく様子が観察された。

一連の活動のプロセスにおいて、コミュニケーションに支障が起こった場合、学習者は、図や絵をもとに、複数言語（英語、日本語、母語）を織り交ぜながら、お互いの共通理解に至っていく様子が見られた。専門内容を理解し合える知識の基盤がある者同士のコミュニケーションでは、専門用語を様々な言語で置き換えながら、図や絵などの他のリソースから引き出される共通の経験や知識を確認し、相互理解に至っているのではないかと考える。

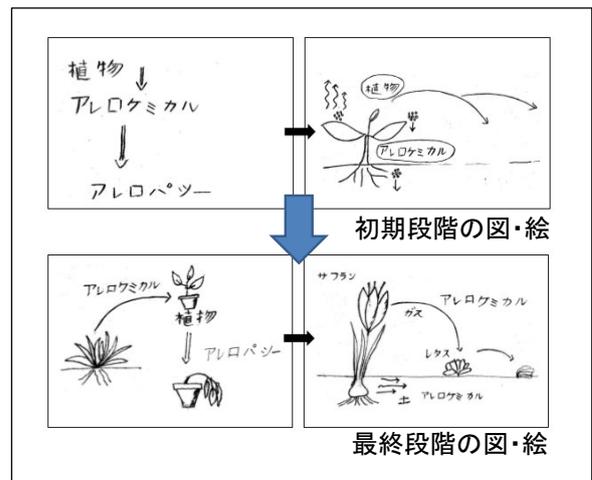


図2 ペアワークにより修正される学習者の図・絵（上原他 2016 より）

【事例3】道具の活用

本活動では、上記に示した通り、図・絵を手描きで描くことが説明する内容や構成の吟味になっているため、学習者は文字による発表原稿を作成しなかった。それにより、発表練習の準備をする際、拠り所となる台本がなかった。そのため、学生の中には、スマートフォンの録音機能を活用して、自らの発表を録音し、振り返り、改善して

いる様子が見えかけた。また、語彙を調べる辞書として使用したり、スライドを写真に撮ったりするなど、活動のプロセスにおいて、自主的にスマートフォンを利用していた。

図や絵などを手描きで描きながら相手に説明することでプレゼン内容を構成していくやりかたは、「鉛筆と紙」のみを使っただけで原始的な作業だと思われるが、学習者は、このプロセスに、機能性の高いスマートフォンという学習者にとっては身近な道具を巧みに活用していた。これも限られたリソースを生かすモードの活用のひとつであると考えられる。つまり、学習者は専門に関する知識を明確に持っており、それをもとに、プレゼンテーションで伝えたいと思っていることははっきりしている。しかし、日本語による書き言葉の言語リソースは限られている。図や絵を描きながら、クラスメートをやりとりをすることで説明内容は音声言語では表現できるようになっていくが、記録に残すことがむずかしい。その記録のための道具リソースとしてスマートフォンは用いられているのである。

#### 4. むすび

以上、理系分野を専門とする大学院生、研究生を対象とするプレゼンテーション活動の一部をマルチモダリティの活用の観点から分析した。その結果、言語リソースに限られていても、それを最大限に活用すべく他のモードとともに表現したり、やりとりを行ったりすることによって、専門のトピックに関する説明内容が構成されていくプロセスが観察された。日本語における読み書きの必要は低い、自分の専門を日本語で説明したいという理系留学生のニーズに適した活動であったと思われる。

学習者らは他者とのやりとりを通して自主的に説明内容を修正していた。限られたリソースを生かすためにあらゆるモードを活用することが教師主導ではなく、より学習者が主体的に学習に取り組むことにつながる可能性も窺えた。

人のコミュニケーションは元来、マルチモーダルなものであるが、日本語授業はこれまであまりにも言語のみに特化し、他のモードと切り離して教育を行ってきた傾向があるのではないかと考える。日本語授業にマルチモダリティの視点を取

り入れることで、あらゆるモードの活用により、限られたリソースを最大限に生かしたコミュニケーションを実践する教育が可能になるのではないだろうか。特に、人やモノや情報が加速的に流動するグローバルコミュニティで研究をする理系学習者には、専門分野の知見を土台に、言語のみならず、ありとあらゆるリソースにアクセスし、コミュニケーションしていく力の養成を行うことが有用であると考えられる。

今後は、マルチモダリティの視点を取り入れた日本語授業を続けながら、学習者同士のやりとりを中心によりミクロに分析を行いたい。それと同時に、学習者自身が自分のリソースを最大限に生かしながらコミュニケーションを行うプロセスを意識化できるような実践活動も試みていきたい。

#### 付記

本研究は平成28～30年度科学研究費補助金(C)「理系大学における複数言語使用者の「位置取り」を探るマルチモーダル分析」(課題番号:16K02802 研究代表者:本郷智子)による研究結果の一部である。

#### 引用文献

- 上原真知子・小熊貞子・広田妙子・山崎真弓・本郷智子 (2016) 「図・絵ですすめる農学系プレゼンテーション活動」『日本語教育方法研究会誌』23(1)、10-11
- 佐藤慎司・佐伯眸 (2017) 『かかわることばー参加し対話する教育・研究へのいざない』東京大学出版会
- 本郷智子 (2017) 「複数言語使用場面におけるマルチモダリティの焦点化」『早稲田日本語教育学』、早稲田大学22、21-40
- 村田晶子 (2009) 「複言語状況におけるブリコラージュが意味するもの 工学系の2つの共同体における事例から」『WEB版リテラシーズ』6(2)、1-9
- Canagarajah, S (2013) *Translingual Practice*. London: Routledge.
- Jewitt, C., Bezemer, J., & O' Halloran, K. L. (2016) *Introducing MULTIMODALITY*. London: Routledge.
- Kress, G., Jewitt, C., Osborn, J., & Tassels, C (2001) *Multimodal Teaching and Learning: The Rhetoric of the Science Classroom*. London, Bloomsbury.

- Kress, G., Jewitt, C., Bourne, J., Franks, A., Hardcastle, J., Jones, K., and Reid, E (2005) *English in Urban Classrooms: A multimodal perspective on teaching and learning*. London: Routledge.
- Kress, G (2010) *Multimodality: A social semiotic approach to contemporary communication*. London: Routledge
- Pennycook, A., & Otsuji, E. (2015) *Metrolingualism: Language in the city*. London, England.

---

\*東京農工大学国際センター

## Utilizing ICT tools in reading and writing class of the Japanese language

IWASAKI Hiroyoshi

This paper reports the reading and writing class at Tokyo University of Agriculture of Technology (TUAT) where I utilized the Information and Communication Technology (ICT). Some of non-Japanese students at TUAT find difficulties in reading and writing in Japanese even after finishing the basic studies of the Japanese language. In order to solve the difficulties, I, the lecturer, utilized Edmodo, one of SNS (Social Network Services) created for educational purpose. Students in the class are encouraged to write a passage online. They are advised to use all resources available to foster their autonomy. The online quizzes enhanced the students to study vocabulary and kanji before class. That helped the students concentrate on reading tasks in class time. The paper reports the details of the class activities and the consideration of how ICT tools helped solve the difficulties of the students.

**Keywords:** ICT, Edmodo, reading and writing, online quizzes, individualization

### Development of the “UEC Kanji Road Map”

- An Examination from the Perspective of the “Prior Learning of Kanji Vocabulary” -

KASAHARA Takeda Yuko • NAKASHIMA Megumi • MIYOSHI Rieko • HAMANO Tetze

The Center for International Programs and Exchange (CIPE) of The University of Electro-Communications has developed a kanji syllabus, “UEC Kanji Road Map”, for the non-kanji background learners majoring in engineering. This syllabus is designed for mastering the 700 kanji, starting from level 1 (the first half of the elementary level kanji) up to level 7. The Level 1 to level 3 (equivalent to elementary and pre-intermediate level) kanji are integrated into the CIPE’s Japanese elementary course textbook. In consideration of the learning goal of the N2 Japanese-Language Proficiency Test (JLPT) examinee, the level 4 to level 7 (equivalent to intermediate level) kanji are carefully selected from the former JLPT syllabus and basic technical terms of the engineering fields. It is said that “prior learning of vocabulary” is effective in learning of kanji for non-kanji background learner. In this paper, we outlined the development of the “UEC Kanji Road Map” and verified whether the kanji in each level is a prior learned kanji vocabulary for the learner. As a result, we found that the “prior learning vocabulary” principle is almost applied up to level 4, and it became clear that when moved from level 5 to level 7, the number of kanji in the “non-prior learning vocabulary” has increased.

**Keywords:** kanji, syllabus, prior learning of vocabulary, non-kanji background learner

## **The University of Electro-Communications International Courses - UEC Academic Skills I (Computer Literacy) -**

**CHOO Cheow Keong**

The University of Electro-Communications (UEC) has designed a series of international courses in 1997, which aim to meet the educational goal of internationalizing the student body and to strengthen student's English skills. These international courses are also offered to the oversea short-term exchange students, providing opportunities to both the regular students and short-term exchange students to interact and learn from each other. UEC Academic Skills I (Computer Literacy) is one of the international course being offered for undergraduate, to acquire computer skills, to facilitate active communication between regular students and short-term exchange students, and simultaneously provides an environment to incentivize the regular students to pursue a study abroad. In this paper, we report on the curriculum contents of UEC Academic Skills I, whose content has been revised in conjunction with the reorganization of the international courses in 2014. A course evaluation by students has been conducted and analyzed in order to spot the problems, and to improve the course's delivery approach and quality.

**Keywords:** Short-term exchange students, International courses, UEC Academic Skills, JUSST Program

## **Subscription of Student Life Insurances by International Students and its Benefits - Case of the student of the undergraduate and graduate courses in UEC Tokyo -**

**HAMANO Tetze**

The staff of the university must be called to support their international students, who have no parent or guarantor in Japan, in the case where they meet with the unpredictable incidents which they cannot handle by themselves. It is often hard for us, the advising and supporting staff for the international students in the University of Electro-Communications (UEC Tokyo), to support our student when they are caught into the trouble with the responsibility of a large payment. In order to prevent their financial difficulty in the trouble, we have advised strongly that our international students should subscribe a set of basic student life insurances since 2008. Currently all of the newly enrolled international students are instructed how to apply for the insurances. In April 2017, more than 70% of the newly enrolled international students subscribe the set of insurances. In this paper, we report how we have encouraged our international students enrolled in the undergraduate and graduate courses to subscribe the set of insurances and what benefits it has brought to them..

**Keywords:** Advising, Student Life Insurance, Risk Management for International Students, JEES PAS (Personal Accident Insurance for Student Pursuing Education and Research)

**Multimodality in Japanese Language Class**  
**- Case Study: Presentation by Drawing -**

**HONGO Tomoko**

This paper reports on the Japanese language practice with the viewpoint of "multimodality." The goal of the practice is to make the best use of learners' limited Japanese language resources. Multimodality here refers to the meaning-making interaction leveraging a multiplicity of modes, including languages, nonverbal behaviors such as body movements and gazes, visual information such as figures and pictures, tools and spaces. As an example, the study analyzes the "Presentation by Drawing" practice conducted for science graduate students to find out how multimodality works in their learning process.

**keywords:** multimodality, mode, interaction, resource, process

多摩留学生教育研究論集第 11 号では、以下の先生に査読をしていただきました。  
ここに記して謝意を表します。

池田 智子                      桜美林大学教授

#### 多摩留学生教育研究論集 第 11 号 編集委員会

編集委員長      本郷    智子                      (東京農工大学国際センター)

編集委員          伊藤    夏実                      (東京農工大学国際センター)

池田            裕                      (電気通信大学国際教育センター)

笠原 (竹田) ゆう子      (電気通信大学国際教育センター)

#### 編 集 後 記

「多摩留学生教育研究論集第 11 号」を無事発行することができました。今年は紙媒体ではなく Web 版の発行にいたしました。留学生を取り巻く環境が大きく変化する中、農工大では本年度を持ちまして、国際センターが廃止されることになりました。電通大と農工大という二つの理系大学が協力して、留学生の日本語教育、国際教育の改善を目的とする論文集を 22 年継続し、教員ひとりひとりに自己研鑽の場を提供して参りました。農工大では、2018 年度から、日本人学生と留学生が協働しながら学ぶ教育・研究環境を構築することを目指した「グローバル教育院」という組織が立ち上がります。組織は変わりますが、今後も留学生教育研究に対する高い志を持ち続け、様々な課題に取り組んでいきたいと思っております。

東京農工大学国際センター  
本郷 智子

**The Tama Bulletin of International Student Education**

**Volume 11**

---

**Reports**

Utilizing ICT tools in reading and writing class of the Japanese language

IWASAKI Hiroyoshi

Development of the “UEC Kanji Road Map”

- An Examination from the Perspective of the “Prior Learning of Kanji Vocabulary” -

KASAHARA Takeda Yuko · NAKASHIMA Megumi · MIYOSHI Rieko · HAMANO Tetze

The University of Electro-Communications International Courses

- UEC Academic Skills I (Computer Literacy) -

CHOO Cheow Keong

Subscription of Student Life Insurances by International Students and its Benefits

- Case of the student of the undergraduate and graduate courses in UEC Tokyo -

HAMANO Tetze

Multimodality in Japanese Language Class - Case Study: Presentation by Drawing -

HONGO Tomoko

**Abstracts**

---

**Tokyo University of Agriculture and Technology**

**International Student Center**

**The University of Electro-Communications**

**Center for International Programs and Exchange**

**March 2018**